大正蠻骨傳

始

特100
134

南人文庫第三編

大正蠻骨傳

弓館小鰐著

東京
南人社發行

大正
6. 5. 25
内交

はしがき

此書に收めたる物語は、總て僕が經驗した自己及周圍の事實を書いたもので、些かでも我が青年學生の氣風に資せんとの微志から、常に誠意を以て筆を執った事を公言し得る。又右の目的で一度は曾て『武俠世界』『冒險世界』『運動世界』等に掲載して、我が敬愛する青年諸君に繙讀されたものもある。

憶ふに今の青年學生が、滔々軟弱の風に趨りつゝあるのは、眞に痛歎に堪えない。剛健なれ、無邪氣なれ、少々は蠻勇でも構はぬ。吾人は國家の爲に軟弱な氣風を青年學生界より一掃せねばならぬ。然し又一面に於て注意すべきは、敬愛する我青年諸君よ、匹夫の勇と名もなき腕力沙汰は又愼しむ可き事である。

大正六年晩春

萬朝報社編輯局に於て

小鰐生識

大正蠻骨傳

目次

惡僧魯智深の洋行……（二）
頑張り先生……（三九）
寄宿舎の餓鬼道……（五三）
青山原の大格闘……（七三）
春涙君等の引致……（九七）
小學時代のある日……（一一七）
蠻勇君の蠻勇覺え帖……（一三九）
一高に入學するまで……（一五七）
徹びた餅……（一七八）
呑氣さんの苦學……（一九八）

大正蠻骨傳

弓館小鰐著
近藤浩一路畫

惡僧魯智深の渡米

髯の中から禿頭

今から十三四年許り前、一高の一部に大江彦一と云ふ痛快男兒が居た。未だ二十二三の癖にどうしたものか頭大に禿げ、帽子を被らぬ所を後から見ると、誰でも五十以上の爺としか見ない。其の代り口の廻りには黒髯蓬々として茂り、延びて來ると鋏でチョキ〳〵切る位で、碌に手入もせずに置くのだから、宛で髯の間から禿頭を突出してるやう。夫に體が肥つて居るから、握り太のステッキをついてノッシ〳〵と歩く樣は、繪にある水滸傳の花和尚魯智深其まゝで、誰云ふとなく

『魯智深』だの『惡僧』だのと云ふ綽名が出來、入學以來一年許の中に『一高の惡僧』と云へば、本鄕通の町家でさへ知らぬものがない程に顏が賣れた。友達が戯談に其禿頭を冷かすと、

『哲學者の頭は皆斯うだ。カントを見ろ、ヘーゲルを見ろ、物を深く考へる人の頭は皆禿げてるぢやないか。』と呵々大笑して相手を煙に捲いて了ふのが常であつた。

實際彼の頭は禿げてこそ居れ、却々明晰な頭だつた。別に勉强する風もなかつたが、大抵級中の上席に据つ

て居た。それでボールも彌次れば、擊劍も彌次る。柔道は校中の牛耳で當時二段中の豪の者を以て知られ、從つて相撲も亦强く、記念祭の餘興相撲などには、片ッ端から十人位撫斬にして、其蠻力に觀客を驚倒させた。

彼は斯麼に恐ろしい人相な上に、大の蠻骨であつたが、天性情に厚く、至つて友達思ひ、學校思ひであつたから、學友の人望忽ち一身に集まり、屢寮の委員や演習の際の中隊長に選ばれ、其非凡なる人相體格と共に名物男——顔役として一高の誇りとさるゝに至つた。

■夏休み中に米國渡航

明治卅七年の夏、丁度日露戰爭の最中のことである。惡僧君は優等

の成績を以て、第一部法科の二年から三年級に進級した。

彼は試驗前から、其夏休み中に北海道の深林冒險旅行をやらうと企て、若し優等で及第したらば、鄕里廣島の兄貴から五十圓の旅行費を貰ふ筈にして居たから約束に依つて其縣賞金を得、直ちに旅行の準備に取蒐つた。所が其頃折惡しく長雨續きで、途中の鐵道線路が壞れる、鐵橋が墜ちる、便々として其開通を待つて居ては何時迄出立が延るか分らない。天を眺め乍ら下宿の二階にモジ〳〵して居たが、とうとう悒え切れなくなつて、寧そ別方面に突飛なる大旅行をやらうと企てた。

大旅行とは、夏休暇中に亞米利加に渡航しようと云ふのであつた。彼は豫々毛唐の國に渡つて語學の修練旁々其國情を見、且つは機會を得

て日本人の眞骨頭を彼等に示してやりたいと考へて居たから、斯う計畫を變更するや、第一番に必要な旅行免狀を得べく、學友の紹介狀を貰つて、其親戚なる時の政務局長――故人になつた後の某國公使――を外務省に訪れた。

『どうか特別の御計らひで、急に旅行免狀を頂戴したい――向ふへ渡つても誓つて日本人の恥、日本の迷惑になるやうな事は致しません。』

政務局長氏も夏休暇の米國旅行と云ふ奇拔な計畫に驚かされたが、

同じく豪放な人であつたから、一見惡僧君の人物を信じて其行を壯とし、即座に其手續をして呉れる事を諾した。

『宜しい、本省から直接差上げる事にしよう。而し百圓の見せ金と云ふ奴を持つて行かぬと、向ふでは上陸させんが其方は大丈夫かね？』

『エイ、御念には及びません、見せ金も旅費も相當に用意致して居ります。』

實は天にも地にも北海道行の五十圓しか持つて居ないのだが、若し無いと云つて、それでは困るなどゝ遮られては面倒臭くなる。免狀さへあれば後はどうともならうと、手輕く、さり氣もなく返答した。

局長氏は親切に渡航上の注意をし、且多忙の間を割いて桑港の日本領事に紹介狀まで書いて呉れたから、彼は例の禿頭を下げて厚く

其好意を謝し、揚々として外務省を出た。局長は玄關まで出て、『マア一つ痛快な事でもやつて、毛唐の膽玉を驚かして來給へ。』と微笑し乍ら見送つた。

■使ひ途は聞くな

偖今度は旅費の不足分と、見せ金は出來ずともいくらか豫備金の才覺をせねばならぬ。彼はノートブックの上に『新計畫費奉加帳』と書いたものを作つて、親友の所を持廻つた。

『オイ、君の出來る範圍で、出來る丈多く金を寄進して呉れ。うまく行けば二三ヶ月の後二倍にも三倍にしても返す。要するに屹度損はかけん。』

『ヨシ、僕はこれ丈進げよう——而し方々から集めて、一體何に使うんだい？』

『マア使ひ途は聞くな。決して徒爾な事には使はんから……。』

友達は皆彼を信じて居るから、屹度下らなく費消するものではないと、云ふがまゝに奉加帳の一員に加はり五圓三圓の寄進が、一日廻つた中に五十餘圓に達した。

彼は其中の二十數圓を割いて、繪草紙屋から歴史畫の錦繪を買求め之をズックの校嚢に入れて肩にかけ、

荷物と云つてはタッタそれ切り、柏葉雙白線の校帽、霜降小倉の制服に餘り新しからぬ靴を穿ち、丁度登校の時のやうなスタイルで、誰にも告げずに瓢然と新橋ステーションを鹿島立した。横濱に於る病症檢査には勿論故障のあらう筈もなく、警察の所持金品檢査も巧に切抜け、三等の賃金を拂つた殘り二十圓足らずを懷にして、太平洋上の客となつた。旅行免狀を得てから之が漸く三日目の午後なのである。

惡僧君には嬉しくてならぬ旅立ちなのだが、他の送られる人、送る人は別れの哀しさに涙を流してるものが多かつた。彼は心の中で『泣くな〳〵皆希望があつて出かけるんぢやないか、何を泣く事がある？』と獨語してる中、船は遠慮なく目的地に向つて、日本の土地を遠ざかつて行く。惡僧君は、もう嬉しくつて〳〵堪らない。

支那人二十名と大立廻

一間を二重に仕切つた蠶棚のやうな三等の居室には、流石寄宿寮の萬年床に馴れた彼も少々弱らされた。殊に外國船の三等と來ては汚なくて臭くて、其上船客の多くは支那人の移民だから、多勢を恃んで横暴を逞しうする。惡僧君は超然として携へ來つた平素愛誦の韓非子などを默讀して居たが、支那人は船中のつれ〴〵に賭博やら飲酒やら、始終ガヤガヤと喧しくてならない。時には惡僧君に向つて譯の判らぬ惡口を云ふ事もあるので、何時か折を見て彼等を凹ませ、戰勝帝國の餘勢を船中に知らしてやらうと思つて居た。

出帆後一週間目ばかりの事、惡僧君は船室内の蒸暑さに後甲板に出

て、日蔭に陣取り校嚢を枕に午睡をして居たが、一寸便所に行つて歸つて見ると、一人の支那人が校嚢を探して在中の物を盗み見んとして居る。

『此泥棒！何をするかッ。』

惡僧君は斯う叫んで、左手に其支那人の首筋を掴まへ鐵拳を固めて烈しく毆り付けた。驚いた支那人は『キャッ』と奇聲を發して、其拳の下を逃れようと焦燥つたが放さばこそ、ポカ〳〵續け様に毆つて居る中に、斯と見た他の支那人は

仲間の一大事と、十五六人一固まりになつて、ワッ〳〵叫び乍ら打蒐つて來た。

惡僧君は固より期して居た處だから、今迄毆つて居た奴を遠くへ蹴飛ばし、『今日こそ懲してやるぞッ！』と船壁を後ろ楯に構へ、右に左に當るを幸ひ蒐つて來る奴を投る、蹴飛ばす、張倒す。船中はワイ〳〵大騒動であるが、駈付けた船員等も雙方の勢の烈しいので制しようにも手が付けられない。惡僧君も三つ四つ敵の拳骨を頂戴したが益〻奮力を揮つて荒廻る中、一人にかけた足拂ひが美事に極つてコロ〳〵轉倒した拍子に、運惡く朽掛つて居た欄干の針金に當つたから堪らぬ。針金は折れて件の支那人は欄干の下を潜り、二丈餘の甲板から洋上にザンブと許り落こつた。

■房州で覺えの水練

サア大變！躊躇して居る中に船はどんどん進航する。溺れ死でもしては大事になると、惡僧君は突嗟に欄干に飛上り、房州の水泳會で覺えある逆下の要領見事に、續いて海中に飛込んだ。

船上は丸で鼎の沸るやう、『二人を死なすな。』『船を停めろ。』『ボートを降ろせ。』と大騒ぎの中に、惡僧君は得意の横延しで落下した支那人に泳ぎ付き其體を抱き捕へる。墜ちた拍子に氣絶して居たから却つてジタバタ動かれる世話もなく、片手泳ぎで船に目指す中に、船は早くも後進してボートを降し、禿頭黑髯の壯漢と頭に尾のある支那人とを泮上より助け上げた。

支那人は氣絶した爲水を呑んでなかつたから、惡僧君は講道館免許の活を入れて忽ち息を吹返させた。敵手の仲間は、もう呆氣に取られて何れも目をパチ〳〵し乍ら閉息して居る。先刻からどうなる事かと驚いて見物して居た白人等は、唯々彼の働きに驚倒して『日本の柔術』だの『不可思議な柔術』だのと呟き合つてる。惡僧君は如何に惡い奴原とは云へ、海中に投込んだ上船

全體に迷惑をかけた事だから、來合はせた船長其他に對し周到に陳謝の辭を述べた。而し固より非は彼等にあると判つて居るから、却つて敬意を以て迎へられ『流石日本人は大國の露西亞に勝つ丈ある。』などゝ御世辭さへ列べられた。

此事があつてから、惡僧君は船中男女の注目を一身に受け、支那人も最早恐れて不遜な事はせず、一等船客の白人中には是非柔術を傳授して呉れなどゝ賴んで來る者もあつたが、彼は其麼請ひには應ぜず、不相變三等室に燻つて例の韓非子を讀耽つて居た。

月謝を拂つたお蔭

洋上船に行合うた時の情緒、無名の孤島に見た鳥群、布哇金剛石角の佳景、船客中に於ける幾多の小悲喜劇など、陸上にあつては全く知り得ざる趣を味ひ、二週間の後斷崖館を右に見て船は金門灣に入つた。間もなく勾配に建てられた尖つた家の櫛比してる桑港の市街が眼前に展開されて、乘客は一齊に、一刻も早く大地を踏みたいと、此到着を喜び勇んだ。

而し惡僧君には、上陸に就て見せ金のないと云ふ一つの大難關がある。萬一之なき爲にこゝまでやつて來て逆戻しを喰つてはと流石に不安にも思はれたが、そこは學校に月謝を收めて英語を習つたお蔭、何とか巧く云ひ拔ける方法もあらう、要は臨機應變だと臍を固めて、同船の三等船客と一緒に、ゾロ〳〵と移民局の檢査場に通つた。白い筋の海軍帽を冠り粗末な小倉服を肥大な體軀に看け、鬚の中より顏を出

してノソ〳〵隨いて行く此異風の壯漢を、相遇ふ白人等は總て奇異の眼で見返つた。

移民官は一段高い處に居て一々免狀や見せ金を調べ今後の就職方法、在留豫定地などを訊く。處が此移民官は極僅かの日本語は話せるが、迚も移民等に通ずるやうな事は出來んから、面倒になつて直ぐペラ〳〵と英語で訊問し出す。移民の

中にも多少話せるものもあるが、大抵は眞個の日本語さへも判らぬ地方人だから、互に判る筈はない。雙方焦燥がつて、徒に時間を費すのみであるから、こゝぞと見た惡僧君はッカ〳〵と移民官の前に進み出で、流暢な英語で話しかけた。

『甚だ失禮だが、貴殿にはまだ日本語は御不自由なやうに拜見する。若し御望みとあらば、通譯の勞を執つて上げてもいゝが如何でせう？』

移民官は先刻から困り拔いてる處だから、渡りに舟と喜んで早速に之を諾した。

『有難う〳〵。若し君がそうやつて呉れゝばこんな都合のいゝ事はない。何卒御賴み申す。』

『宜しい。私も喜んで貴殿の爲に通譯致しませう。』

同胞の連中も珍紛漢で弱つて居た折だし、殊に船中の活劇で日本人の肩身を廣くして呉れた人だと熟知してるから『先生宜しく御頼み申します。』『私共も助かります。』などゝ頭を下げて口々に頼み入るのであつた。

■移民官のお世辭

惡僧君は全然呑込んで、雙方の云ふ事をいとも滑らかに通辯した。中には同胞等の云ひ分よりもより都合よく移民官に聞かせたりしたから、總て具合よく通過した。斯て最後に惡僧君一人殘つて調べられる番になつた。

『いやどうも有難う、全く君のお蔭だつた。實は移民官は、總て來航

する國民の國語を知つてなくてはならんのだが、何分新任匆々なので御迷惑を願つた次第だ——時に君は何れに御出で〻、何方へ御在住の積りかな？』

惡僧君は今こそ運の極め時と、一足踏出して莊重に返答した。

『御禮では却つて痛み入ります。……私は日本の政府直轄學校の學生ですが、今度夏休暇を利用して修學旅行に參つたので御座る。旅行免狀も、外務省から領事館への紹介狀も此通り所持して居ますが、御尋ねになるべき見せ金の方は一寸定額を缺いて居ります。而し決して貴國に迷惑をかけるやうな事は致さんから、そこは貴殿の御鑑識を以て宜しく御取圖らひを願ひたいもので……。』

『イヤナニ、其事なら御心配は要らん、官立學校の學生で見學の爲と

あれば、外の勞働者など丶は自ら取扱を別にします。其御心配なら御無用々々。若御入用ならば御旅行先へ紹介狀を差上げても宜しい。』

自分の役目を助けて呉れた禮と、語學の巧いのに感服して、色々な御世辭迄列べる。惡僧君は虎口を免れた心地、餘り深入しては却つていかんと、い丶加減に切上げようとした。

『御親切誠に有難う存じます。又御願ひする事も御座いませうが、今日は之で失禮します。』

『ア丶そうですか、私の自宅はゲリー街の○○番ですから御用の時は何時なりと御尋ねを――マア折角御丈夫で旅行なさるやうに祈ります。序乍ら貴國の光榮ある戰勝を禱ります。』と手を延べて握手を求め御世辭のあり丈を列べて送り出した。

玆に於て惡僧君は天下晴れての旅行者、大手を振つて桑港の町に搖るぎ出た。

■冷酷な領事館

偶に行遇ふ同胞でさへ、奇體な同國人が舞込んで來たと變な眼で見る。況て白人は皆立止つて目送する。トムのボビーのと云ふ惡太郎連は、ワイ〳〵囃し乍ら隨いて來て五月蠅くてならぬ。惡僧君は時々之に調戯ひ乍ら『俺は露國を倒した、日本の軍人だぞッ。』など威かしてやると街頭を迂呂付てる大男の巡査が、之を眞個にして、丁寧に擧手の禮をするのもあつた。

道を聞き〳〵兎も角も日本領事館を訪ねて行くと、名乘りもせぬ中

から喰詰者扱にして玄關拂を喰はせようとする。流石に局長の紹介狀を見せてからは、態度が變つて空世辭を云つたが、矢張敬遠主義を執り、結局日本人贔負の『日本人の叔母さん』と綽名されてるR老嬢に一本の紹介狀を呉れたぎりで、體よく左樣ならと來た。惡僧君は心中大に癪に障らざるを得ない。

『誰がお前等の世話になるもんか。お前達のやうに厭に役人風を吹かすものが居るから、同胞の事業も思ふやうに發展しないんだ。俺は俺で遠慮なしに俺のやる事をやる。』

併しまだ全く土地不案内で、何處へ行つて何をしたらいゝか判らないから、無效だつたらそれ迄と、兎も角そのR老嬢を訪ねて見た。

■錦繪店の番頭君

R老嬢は流石に『日本人の叔母さん』だけあつて、惡僧君を非常に親切に待遇した。

『若し貴君さへ差支がなければ、私の許に泊つて居て、持つて來た繪の商賣をしても宜しい。私は貴君の爲に知合の人々を集めて、慈善市を開いて上よう。又普通の日には窓の下で露店を開いても構はない。』

交際の廣い媚さんだから、方々へ此事を通知してやると、物珍らしさと義理とで、美しい婦人連の買手が澤山集つた。會をせぬ日は、家の前の芝生に卓子を据ゑて店を開く。鬼のやうな惡僧君が、花のやうな令嬢連に圍まれて、一々繪の説明をする有樣は、又却々振つて居る。

『エー之は日本の大忠臣楠公が、其子正行と櫻井の驛に訣別する所。

次は四十七浪人が、主人の讐を復し、其首を得て主君の墓に奉る有様。又之は日本の女流詩人紫式部が、石山寺に籠つて長篇の物語を草し居る圖で御座い……。』

元來お轉婆なヤンキー少女は、遠慮なしに惡僧君に對して色々な質問を發する。惡僧君は法螺を交ぜて、面白く巧に繪の說明をする。俄繪草紙屋は、爲に

非常な成功で、一枚五錢位の錦繪が、五十仙乃至一弗位に賣れ、數日にして悉く之を賣盡し、合計二百弗近くの收入を得た。R老孃も大に世話甲斐のあつたのを喜び、惡僧君は厚く禮を述べて、沿岸南部の旅行にと出かけた。

■空汽車に假睡

スタンフォード大學のあるパロアルト、美しい小都會サンノーゼ、パサデナの農園、フレズノの娯樂場など、各特色ある地方に旅情を慰め、二十日許り悠遊してる間に、曩に儲けた金も殆ど使ひ果した。もう錦繪の資本も種切れになつたから、之からは腕で儲ける外仕方はない。兎も角ロスアンゼルス市迄行つて口を探そうと、或日日が暮れて

から一小驛に入つて次の列車を待つ間を、鐵路に放置してある空き客車の中に入つて假睡んだ。

呑氣な惡僧君は本郷の洋食屋バラダイスか何かの夢を見て居たが不圖眼が醒めて見ると、乘つて居る車が全速力で何れへか疾走して居る。南に向つてるか北に向つてるか、方向は丸で判らんが兎も角眞暗な中をひた走りに走つてる。

偖は眠つて居る間に走り出したのだと氣が付いたがもうどうする事も出來ない。まゝよ、なるやうになれと膽を据ゑてボンヤリ暗闇の外の景色を眺めて居る中、暫くして、後の方の車室からコツ〳〵と靴音が聞える。斯麽時逃げ隱れしては却つて失敗の基、先んじて向ふを征服するに若かずとニヨキリと車室の中に立つて其扉の方を凝視て居る。何氣なしに巡視して來た一人の青年車掌、扉を開くと髯むぢやの恐ろしい壯漢が、室の中に突立つて居るからアッと驚いた。

『何者だッ！』と叫び樣、隱囊に手を入れて、短銃を探らんとする。

惡僧君は態と落着いて、

『狽てちやいかん、怪しい者ではない。僕は日本の高等學校の生徒だが、今度此國へ旅行に來て、偶〻空き汽車に假睡んだ暇に輓き出されたのだ。若し乘車賃が要るなら支辨する。間違つた事をするな。』

車掌は其態度を見て漸く心融けたと見え、短銃を懷に收め、傍らに近寄つて來て話かけた。

『フヽム、君は日本の學生とな？　今露西亞と戰をしてる――そうか僕は日本のやうな強い國が大好きだ。そして君は何しに我國へ來たか？』

『夏休暇中遊びに來たのだ――それより此汽車は一體何處へ行くんだ？』

『ロスアンゼルスへ行く。』

『そうか、夫れあ願つたり適つたりだ。マア僕の粗忽はどうか勘辨してくれ給へ。』

『イーヤ、どうせ空汽車だものちつとも構はん。まあ羅府へ着くまで

日本の話でも聞かして呉れ給へ。』

斯麼風で惡僧君は、此青年車掌と意氣投合し、忽ち懇意になつた。

青年名をバーネンと云つて、至つて快活な好人物、羅府に到着後其周旋に依つて二ヶ月許り其鐵道會社の書記に補任し、其間共に亞米利加印度人の部落を冒險して寶石と日本のメタルとを交換して來たり、バーネンに敎へた柔術で伊太利人の破落戸を懲したり、バーネンが Job（仕事のこと）と云つたのを Jap と侮つたのだと間違ひ、倶樂部で大立廻りを演ずるやうな色々な珍聞を殘し、十月末旅費の外に二百餘圓の金を懷にして歸朝した。

■グランドホテルで大宴會

友達は惡僧君が夏休暇後二ヶ月も歸つて來んので、どうしたらうと心配して居たが、十一月三日奉加帳に連名した人々へ宛て、横濱グランドホテルへの招待狀が來た。『彼奴どうしたんだらう』と一同好奇の眼を光らして乘込んだ處、頭は依然禿、髯は相變らず蓬々として居る元の惡僧君だが、新式のハイカラ脊廣を澄して着込んだ姿物々しく、大食堂で酒池肉林、素敵な饗應をした後、渡米旅行の顚末を演說して且出發前の好意を謝し相も變らぬ奇拔さに一同をアッと驚歎させた。ホテルを出る時に脊廣を脫いで其處のボーイに遣り、ズックの校囊から霜降の制服を出して着替へ、本鄕通を皆と一緒に『アムール河の流血や……』を歌ひ乍ら五ヶ月振で寄宿寮に歸つた。

寄宿寮に歸つて見ると大騷ぎだ。惡僧魯智深が、何でも米國に押渡

つて大富豪の令孃と結婚して、一躍美人と巨萬の富とを得て歸つて來たんだ。彼奴流石に恥しいと見えて、横濱まで來て其處で披露とシャレて居る。此方に呼んで一つ飲んでやらうぢやないか、などゝ相談して居る所へ、惡僧五ヶ月以前寮を出た時其儘の姿でノソ〳〵歸つて來たので、一同は開いた口が塞がらなかつた。

惡僧魯智深君、今は某省の參事官として眞面目に働いて居るが、其の當時の暢氣なやり方と、錦繪で金儲けをした智慧とで、大に省内に重きを爲して居る。

頑張り先生

小僧先生との綽名

武井浩三先生は、僕が中學時代に教はつた先生の中で、最も印象の深い一人である――先生が中學の教諭心得月俸三十圓で赴任して來たのは、まだ三十三歳の時で、理科大學に在學中であつたのが、家の都合で休學せねばならぬ事になり、此中學へ雇はれて來たのだと云ふ事は、暫らく經つた後で聞いた。

何處の中學生でもさうだらうが、新任の教師が來る旨の掲示がされると、どんな先生だらう、どんな顏の人だらうと好奇な目を以て待構

へてる。そして殆んど通則のやうに、最初の見參で『偉らさうな先生だネ』とか『何だか駄目らしいぢやないか』などゝ、當分の相場を極めて了ふ。それが髭でも生えて怖さうな顏でもしてると、生徒は其第一印象で、自然內心にも態度にも尊敬の念を起すが反對に風采でも揚がらぬとか或は服が立派でなかつたりすると、之は與し易しと見て少しく輕蔑してかゝる。武井先生は種々な點に於てどうしても輕蔑される方の組であつた。

第一歳が生徒といくらも違はず、若い顔だけ見ては迚も教師とは受取れなかつた。それに丈の低い太つちよな體の格好が、其クル〳〵した眼玉と共に何となく滑稽に見えたし、大學の金釦を黒の釦に變へたらしい洋服も甚だしく振るはない。一般の教師が名簿を呼び上げる時皆生徒の名を呼棄てにするのに、誰々君と君付けにするのも、却つて尊敬の念を減ずる一材料になつた。

『ナンだ、今度の先生は莫迦に若造ぢやないか、あれで少しは出來るのか知らん。』

『あれぢや中學の教師と云ふ資格がないネ——武井浩三ではなく武井小僧だよ。』

控所に於ける生徒の批評は、先生の若年なのと風貌の立派でないのとで、第一日から斯く不利なる相場を付けられて了つた。そして早くも小僧先生と云ふ綽名が付けられた。

■輕侮が尊敬に一變

斯う武井先生を廉く視た生徒の中には教場で、隨分不遠慮な振舞をするのもあつた。併し先生は丸で是等の者を眼中に置かぬやうな風でずん〳〵授業を進める。受持ちの課目は博物と英語であつたが、之は從來の教師が迚も比較にならぬ程解り易く且つ生彩に富んだもので質の惡い生徒が故意と難問を吹きかけて見ても、常に明快な解答を以て擊退された。一週間許りの中に、最初輕蔑してかゝつた生徒の方が、何だか見かけに似ぬ出來る先生だと思ひ始めるやうになつた處へ、偶

然生徒を敬服せしむるやうな事件が起つた。

當時米國有數の大學々長で、哲學博士の確かロバートソンとか云つた名士が日本へ來たが、偶ま觀光の途次にM市に立寄り、師範學校の大講堂に於て、官民有志及び學生の爲め一場の講話をする事になつた。此日集まるもの數千人、通譯は師範の教頭なる英語教師が選ばれて出たが、ロ博士の快辯で說く高尙なる講話は、其教師の學力ではどうも荷が勝ち過ぎたらしい。始めの中はどうにかかうにか通譯して居たが、中途で迚もいけなくなつたと見え、博士に向つて其旨を語り大汗で獨りソコ〳〵に壇を降りた。餘りの突然に博士は壇上に在つて茫然としてるし、聽衆は何が何だか譯が判らず呆氣に取られて居る。主催側の縣廳の役人や、教師連は周章して後任を物色したが、偖誰も適

任者が見當らない。場内は何となくザワつついて來たが、此時迄默つて居た武井先生は『然らば私がやつて見ませう』と博士に一揖してツカ〳〵と壇上に昇つた。

六尺近い博士の傍に、短軀粗服の先生が併び立つた形は實に妙な對照であつた。何も知らぬ聽衆は、斯麽生徒とも教師とも付かぬ人に、大博士の通譯が出來るのかと危んだし、中學の同僚達も本當に武井が出來るのか知らと大に怪しんだ。博士の方では

兎も角い丶處へ出で呉れたと云ふ風で、直ぐ講話を續け出したが、武井先生の之に對する通譯は實に明快を極め、前の師範の教頭が澁り澁り取次ぎするのとは雲泥の相違である。聽衆は皆意外の感に打たれつ丶恍惚として傾聽し、中學の生徒などは狂喜して兩者の快辯妙所に至る毎に、雷の如き喝采を浴せる。斯くして其後一時間許りに亙る演說は、非常なる感興の間に見事に演了された。

博士は壇を降りるや握手を求めて厚く其勞を感謝する。聽衆の驚歎は固より知事や校長などは非常に喜んで、君の爲に珍客に對する禮を失せずに濟んだと心から賞讃した。中學の生徒も自校の名譽のやうに喜び合ひ、是迄の輕侮は忘れたかの如く俄然として深い尊敬の念に一變した。もう小僧先生など丶綽名を呼ぶものがなく、見かけによらぬ

偉い先生だと敬服されるやうになつたが、併し先生の風采は依然として揚がらぬものであつた。

■先生が對抗戰の捕手

斯麼事から生徒の方で進んで先生に親しむやうになつたが、先生も親切にそして少しも氣取らずに色々と生徒を指導した。殊に其好む運動に於て熱心に努力し、遂には中學運動部の新紀元を作る程の發達を遂げしめた。

其頃地方の野球は、漸く捕手丈がミットを用ひ始めた時分で、捕球投球共に頗る幼稚なものであつたが、先生は高等學校時代に捕手をやつた經驗があるので、時には自らマスクを被り親しく其範を示した。

今から考へて見ると、先生と雖も勿論大した事はなかつたに違ひないけれども、バットの後で瞬きもせずに球を捕る事が、吾々には異常なものとして眺められたし、それに英書に依つて規則や戰法を詳しく敎示されたから、選手一同の技倆は非常な進歩を見たのである。

或時、同縣のT中學野球團が修學旅行の序に遠征して來て、M中學の校庭に對抗野球戰が行はれた事がある。先生は生徒等と共に頻りに自校の聲援に努めて居たが、三四回目の頃M中學の捕手が過つて指を挫き、到底戰ひを續けられぬやうになつた。併しM中學には代るべき捕手が一人もない。さればと云つて經驗のない者に代らせては見す見す敗戰の憂目を見なくてはならぬし、どうしたらよからうと云ふ騷ぎになつたが、武井先生は此時『俺が代りに出よう』と云ひ出した。固

よりT中學から、生徒以外ではと云ふ反對說が出たが、先生の主張が甚だ振つてる。そしてそれが大眞面目なのである。

『狹義の解釋では生徒同志の試合と云ふ事も云へるだらうが、併し對抗と云ふ以上は、學校と學校との對戰に違ひないではないか。然らば生徒でなくとも、學校所屬のメンバーなら少しも差支はない譯だ。』

この云ひ分には一應の道理もある事だし、それに相手は敎師が代理なら大した事もあるまいと、結局先生が出る事になつて戰が續けられた。先生は一生懸命、時々チップの球を胸板にブッけなどしたが、始終元氣よく奮鬪し、大惡戰の後僅かの差を以て勝はM中學の手に歸した。眞圓い體で丁度團子でも轉がるやうな走塁振は、今尙僕の眼底に殘つて居る。何しろ生徒と一緒に對抗試合に出た敎師は、野球あつて以來

始めてゝあらう。

併し野球では、追々生徒の方が上手になるやうになつたが、劍道に於ては幼年時代から父君に奬勵されたと云ふ丈あつて、非凡なる技倆を有して居た。同じ頃故渡邊昇子が武德會の青年劍士數名を從へ、諸方を巡歷の途に立寄られた事があるが、生徒は勿論町の劍士達も殆んど相手になるものがなかつたのに、先生は立派に對等の勝負をして、渡邊子に巡歷中始めて見る好敵手だと激賞された。斯く先生は更に運動に於ても校の名譽を揚げて生徒の益歸服する處となつたのである。

■獰猛なる蹴球試合

先生は、此外何でも運動を好み、且つ生徒に之を鼓吹した。晝の一

時間の休みを生徒等がぼんやり過ごすのがよくないとて、三十分を蹴球に費す事を創始したのも先生である。固より規則も何もなく、いつも三四年に對する五年一年二年の兩組に分れ、校庭の中央で蹶上げたボールを双方から攻め合ひ、反對の敵方の木柵に觸れゝばいゝので、蹴るもよし、手で持つて行くも可しと云ふのだから、其奪ひ合ひなどは實に亂暴を極めたものだ。丁度今ならばラクビー式と云ふやり方であつたが、人數が双方二三百人宛の多數だし、線外に逸して時々休止するやうな事がなく、廣い柵内を處構は

ず飛び走るのだからその痛快さは數倍である。先生も常に一方の組に加はつて奮鬪したが、足が短い爲め走る事は甚だ不得手だつたけれども一度摑まへたが最後、數十人に圍まれても飽く迄頑張つて敵の手に渡さないので有名であつた。今はやつてるかどうか判らないが、斯る痛快簡單なゲームは、武井式フートボールとして滿天下に擴めたいものである。運動場のある學校なら、ボール一つありさへすれば、何等の規則なしに出來るから重寶である。

川を泳いで學校へ

斯麽に運動好き乍ら、授業の方も驚く許りの熱心で、在職五年間休んだことは勿論、遂に遲刻したことさへなかつた。或夏大雨が降つた

時のことである。大學に居た時分の友達が遠方から訪ねて來て下宿の樓上に酒酌み交し乍ら、盡きぬ快談に殆んど夜を徹したが、翌朝出勤の途を幅一町餘のK川河岸に出るで、數日來の大雨で河水激增し、渡るべき橋が押し流されて了つたのを發見した。十數町上流に迂回すれば、汽車の鐵橋があるが、そんなことをして居ては迚も授業時間の間に合はない。二三人生徒も、河岸に立つて途方に暮れて居たが、其の中の一人が『先生一つ泳いで渡りませうか』と云ひ出した。負けぬ氣の武井先

生は『よし』と應じて生徒と共に直ぐ裸となり、服を頭上に結び付けて眞先に濁流の滔々たる中を泳ぎ始めた。生徒の方は此河縁に育つて河水の游泳に馴れてるから增水の中でも樂に泳いで居たが、先生は川の經驗は多くないし、殊に前夜の對飲が利いて居るので、いくら踏んぱつてもズンズン下流に押し流される。生徒は心配して『先生大丈夫ですか』と聲をかけるのを『大丈夫々々々』と返事し乍ら、とう〳〵生徒より四町許り下に流されて辛くも對岸に到着した。先に着いた生徒等が、笑ひ乍ら駈付けて來て『大分參られたやうでしたな、私等は脛返りでもなすつたんぢやあないかと思ひましたよ』と云ふのを聞き流し乍ら、水沫にビショ濕れになつた洋服を着て、生徒と一緒に今度は駈走で學校に向つた。併し此の川越許りは餘程閉口したと見えて、

其翌日から早く下宿を出かけ鐵橋を迂回して登校するので、生徒間の笑の種になつた。

四十度の熱で出勤

ある冬珍らしく(病氣流行性感冒)に罹り、四十度近い發熱をした事があつた。宿の者は頻りに學校を休む事を勸めたが、其日は生徒に書取の試驗をする豫約があつたので、例の頑張から無理に出勤する事とし、眞圓く洋服の重ね着をして俥にも乘らずに學校へ出かけた。流石强情我慢の先生も學校に着いた時はへト〳〵になつて、倒れるやうにして少時卓子に靠れて居たが、始業の號鐘が鳴るや、飛上つて教場に行つた。そして湯氣が立つやうな大熱乍ら、前後三時間の試驗と授業

を終へて歸つたが、病氣の方でも此頑張强いのに辟易してか、翌日はもう忘れたやうに快癒した。同僚や生徒は後で四十度の大熱だつたと聞き、其驚くべき耐忍力に喫驚したが、後日茶話會の席上で、『僕も川と熱で水火の苦しみを經驗したから、一人前になつた――四十度位の熱でも、氣の持ちやうで平氣で居られるといふ事を、醫科大學に報告してやらう』などゝ串戲を云つて居られた。

■二學生と自炊生活

先生は下宿に居る中、學資の豐かでない、併し前途有望な二人の生徒を養はんと志し、町から一里許り距る百姓家の離れ家を借りて、此二人と共に移轉した。引越の際は借荷車に三人の荷物を積み、代る

〳〵押したり輓いたりして行つた。途中で行遇つた生徒が、大分手傳に加はつたので、荷車を運んで行く制服姿の一隊は、頗る町の人の目を聳たしめた。

こゝの郊外生活は實に簡素なものであつた。飯だけは百姓家の嬶に炊いて貰つたが、お菜は先生の指圖で二人の生徒が賄ひ方を勤めた。家の周圍には色々な蔬菜が植付けられる、休日には附近の河や堀へ鰍押し、穴釣り、板網などに出かける、秋や冬には生徒を集めて茸狩や兎の網獵に行く、そして其獲物を持歸つて、一同の馬食會が先生の家に開かれるのであつた。或時の如き調味の砂糖が少しもなかつたので籤引きで町迄買ひに行く事になると、運惡くそれが先生に當つたが、先生は平氣で其任を引受け、往復二里餘りの處を、四十五分許りで歸

つて來られたのには驚かされた。

先生五年の在職中に五圓の昇給あつた事一回、生活費の殘部は悉く書籍の料に費して居たが、僕等が中學を出てから二年の後職を辭し全校惜別の涙に送られて上京された。此時年二十八歳、再び理科大學に復籍して金釦の制服を着る身となり。次で目出度卒業し、今は南洋馬來に在つて大規模の農林業に從事して居られる。吾人は此機會を以て大に先生の健康を祈るものである。

寄宿舍の餓鬼道

■一ケ月二圓五十錢

東京でも十四五年前は下宿料や寄宿舍の費用が今の三分の一位しかかゝらなかつたさうだが、地方では一層之が廉かつた。僕たちは明治二十九年から三十四年迄、東北M市の中學に學び、其大部分は寄宿舍に居たが、寄宿料は食費炭油新聞代など一切で、一ケ月僅かに二圓五十錢足らずであつた。それに月謝が唯の三十錢であつたから、小遣ひが二十錢なにがしとして、總計一ケ月三圓の學費があれば、兎に角やつていけるのであつた。

其代り副食物の貧弱な事も亦素敵なものであつた。朝は實の泳いでるお汁に香の物だけ、晝と晩は時々肉とか肴の事もあつたが、大概は菜びたしとか大根おろし位のもので、人望のない舍監の當番の日には態と鹽か味噌丈で食ふ事もあつた。之は一つは炊事が學生の自治制になつて居た爲もあるので、月番に當つた數人は成丈廉く仕上げて、舍生一同の喝采を得んとする結果、自然お粗末な獻立をしたからであつた。考へて見るとよくあれで營養不良にならなかつたと思ふが、どうして皆其副食物で五六杯の飯を平らげ、別段に不味いものを食つてると思ふものもなかつた。

而し是迄甘く育つて來た田舍の坊ちやんなどは、迚も之に堪へ兼ねて、佃煮などを買つて置いては、食堂に遲く出かけて行つて內々用ゐ

るものもあつた。餘裕のあるものは一杯一錢の皿蕎麥と云ふのを食ひに行くのもあつた。偶に株式會食などをやつても、芋ならば一錢、菓子ならば三錢位で、可也鱈腹有り付けるのであつた。

佃煮の中に鼻糞や雲脂

Iと云ふ舍生があつた。陰鬱な顏をした意地惡者で、平常皆に好かれなかつたが、家が富裕であつた爲、始終鯛味噌や佃煮の類を求めて來ては獨りで用ゐて居た。同室の連中——室は十疊か十二疊で各四五人の雜居であつた——は大に癪に障るのだが、何時も旨さうにやつてるのを見せられるのみで、一度も『食べませんか』と云ふ言葉に與つた者もない。吝な奴だとか、友愛のない奴だとか思ふ皆の氣が一致し

て、何か惡戯をせずには置かなかつた。

最初は鯛味噌の中に、皆の鼻糞や雲脂やを集めて摺込んだりなどした。Iは何にも知らずに曲物を食堂へ携へて行つては、相變らず旨さうに食べて居る。一同横眼で見ては心中痛快を叫んで、後で『俺の鼻糞を喰つて居あがる』などゝ笑つたが、手答へがない丈に、鼻糞位ではだん〳〵面白くなくなつて來た。遂には丹念に蚤を採つて佃煮の中に入れるものもあれば、蠅を刻んで混ぜると云ふ酷いのも出て來る。隣室などから應援に態々蚤の贈り物を寄越すものなどがあつて、可哀相にIは大分蚤と蠅を食べたが、圖らず之が露れて舍監から大眼玉を食ふ事になつた。

それはIと同村から來てる隣室の生徒が、密かにIに告げたからで

Iは之を舍監に訴へたと見え、或日原告被告共に舍監室に呼出された其舍監と云ふのは六十近い漢文の教師で、其時の生眞面目な顔と奇拔な宣告は未だに忘れられぬ振つたものであつた。『お前達は、苟も人間たる者に、蚤や虱を喰はせると云ふ事があるか。萬一その爲に病氣にでもなつたら、何と云つて申譯をする？　若し二度と斯麼汚い事をしたなら、校長に上申して屹度窮命するぞ——又Iも宜しくない、兄弟同樣であるべき筈の同室生の中で、獨りで旨い物を喰ふとは武士道に反して居る。之から獨りで旨い物を食べる事は斷然相成らん。』

Iこそいゝ面の皮で、原告連は恐くもあり可笑しくもありで引下つた。此事があつてからIは間もなく退舍し、其後上京して神田中學に轉校したが、上京中に心臟病に罹つて夭折したと聞いた。まさか蚤

や鼻糞の爲ではなかつたらうが、食はせた方の連中は餘りいゝ氣持がしなかつた。

■牛肉と稱して犬の御馳走

賄の月番に當つたものはなる丈廉い物を買はんが爲に、朝暗い中に起きて青物の市場に出張したり、日曜などには散歩乍ら近村に出かけて、農家から直接に野菜を買つて來たりなどした。而し廉くて普通な物を食はせるよりは、更に廉くて旨い物を食はせる方が、當番の喝采を受ける所以であつたから、惡戯半分牛肉と稱して馬肉を混ぜたり甚だしきは或時の如き犬の肉を混ぜて食はせた事もあつた。

其犬は五年級で動物の實驗にする爲に、野良犬を引張つて來て縊り

殺した奴で、二日許教室に置いて解剖した後に、教師が死骸の取捨て方を小使に命じた。折柄僕が月番に當つて居たから、同じ當番の連中と語らひ、其犬を呉れないかと懸合つた處が、小使も結句厄介拂と思つて、異議なく僕等の手に渡した。そこで股と其他の肉のある處をいゝ加減に切取り、軍人上りの炊夫に情を明かして之を料理させ、牛肉の油味だけをお付合に混ぜて或夕食の膳に上ぼした。一疋の犬にいくらも肉がなさそうに見えるが、料理して見ると大したもので、七

八十人の舍生にタップリ行渡る位ある。何にも知らない上に、牛肉などに滅多にお目にかゝつた事のない舍生達は、元より鑑別し得る譯もなく、舍監先生も一向氣付かず舌皷を打つて召上つてゐる。僕等は腹の中に大成功を叫び乍ら同じく箸を取つたが、何分にも殺す時から知つて居るので、首を吊るされてバタ〳〵苦悶した姿が目の前にチラ付き、外の者の手前、大に旨さうに食はうと努めても、流石に充分には食べなかつた。

我々が愈卒業免狀を握つて、其食堂で舍生から送別會をされた時當時月番であつた一人が『在舍中の思ひ出』と題して追懷の演說をやり、其中に犬肉の獻立をした事も白狀した。一同は今更呆氣に取られ同じく舌皷を打つた舍監先生も列席して居たが、唯苦笑するより外は

なかつた。

■アハヤ雉子と命の交換

舍生の一人に、親父の古鐵砲を貰ひ受けて持つて來てるものがあつた。山國の事で近郊に出かけると、可也の獲物があつたから、土曜日や日曜日を待兼ねては、何時も三四人連で出獵し、交り〳〵打つて若干の小鳥を持歸るのが樂しみであつた。そして舍監に嗅付けられぬやう、部屋の火鉢で燒鳥を拵へ、殘飯の徵發をして來て盛んに腹を肥したものだ。

或十月の下旬、例の通り三四人で獵に出かけ或沼の畔で休息した。もう夕暮近くで、何れも大分腹が空いて來たから、山林で拾つて來た

栗や、其邊の畑から採集した馬鈴薯などを、枯柴で蒸燒にして食つて居ると、突然後の藪から羽音激しく、一羽の雄雉子が飛び出した。ソレッと云ひ樣、僕は傍にある鐵砲を取るより早く、一發ヅドンと打放すと、見ン事當つたと覺しく、羽毛がバラ〳〵と散つたが、直ぐには落ちずに暫らく飛んでから、沼の眞中頃にバタリと落ちた。そしてまだ死切らずに水の上をバタ〳〵悶へ廻つて居る。

何しろ近頃にない獲物である。早く確實に摑まへたいのは山々だが東京と違つて十月末と云へばもう霜の降りる時分、從つて水も莫迦に冷たい。泳いで行かうにも此寒さではと皆躊躇して居ると、三年級のSと云ふ元氣な生徒が『僕が取つて來る』と云ひさま、素裸になつてザンブと沼に飛込んだ。他の三人は恥しいやうな氣がし乍らも、陸か

ら聲援をして勵ましてる中に、Sは眞驀に雉子の處へ泳ぎ着き、首を摑まへて一寸差上げ、『萬歳』と叫んで片手泳ぎに引返して來る。此方でも『萬歳』『萬歳』と叫んで喜んで居ると、Sは變な聲を揚げたと思ふ中ブク〳〵水の中に沒し、又一寸浮上つて手をバタ付かせたが、直ぐ又沈んで了つた。

サア大變！　和服の僕は夢中で裸になり、續いても一人が襯衣を脱ぐ暇もなく飛込む。全く泳ぎを

知らぬ他の一人も着物は脱いだが入れないでまご〳〵して居る。僕は滅茶苦茶に泳いで行つて、滅茶苦茶に潜つて見ると、幸運なる哉、直ぐ底近くにSの體を見付けたから、腕を抱えて懸命に浮上り、間近に泳いで來た一人と協力して、辛く岸に泳ぎ着いた。

Sはグッタリしてもう息がない。急激な寒冷の爲に心臓麻痺(?)を起したらしく、水は多く呑んだ様子がないが、兎も角火で暖めろと云ふので、木の葉や枯草を集めて盛んに火を焚く、一方ウロ覺えの人工呼吸を施す。三人は夢中になつて色々と介抱すると、天も我等を憐まれてか、何分か經つた後、ゲッと水を吐いて生氣付いた時の嬉しさ！今思ひ出しても何とも云はれぬ唯涙が出るやうな心地であつた。

蘇生したSは變狀が急であつた丈、元氣も割合に容易に恢復したけ

れども、三人で交る〳〵負ぶつて、淋しい夜路を暗い心持で寄宿舍に歸つた。遲刻の咎は途中Sが急病を發した爲と云ひ繕ひ、室に入つてSを床の上に寢せた時、更に又『死で呉れないでよかつた』と三人がホッとして顔を見合せた。强情なSは水に沈んでも尙件の雉子を摑まへて居たので、二三日の後命拾ひの祝として四人で此尊い獲物を平げた。Sは今海軍大尉として某驅逐艦長を勤めてる。

■消燈後臀砲の交換戰

夜の七時から十時迄は自習時間と定められて居たが、一時もヂッとして居られぬ若い書生達は、其間も何か惡戯をする事を忘れなかつた。よく入學したての英語を知らぬ生徒などが、同室の上級に云附けられ

て、WCの辭書を貸て呉れのダング(糞)の讀本を貸て呉れのと眞面目に命ぜられた通りの奇怪な名を云つて、遠くの室迄使させられるのもあつた。そうかと思ふと室の障子をソーッと開けて向ふの側の室の前に立ち、ブーと一發發射して逃げて來るのもある。すると之が開戰の砲火となつて、間もなく向ふから答砲を發射に來、盛んに應砲が始まつて、到頭舍監のお眼玉を食ふ事も

ある。Yと云ふ優等生で、而も隨時に發砲の出來ると云ふ放屁の名手の居た室は、常に戰ひに勝を占めたが、此Yが化學を習つた初めに、アンモニヤ瓦斯の燃燒せぬ實驗をやると稱し、燐寸を尻に近づけて火傷の滑稽を演じた事もあつた。

晩飯は五時半であるから、九時過ぎになるとポッ〳〵腹が空いて來る。さうすると二錢三錢の醵金をして、何がしかのコンミッションを小使に提供し、密かに芋とか駄菓子の類を買つて來て貰ふ。小使室に行くと此懇請使が鉢合せをして『君の處でもか、物は何だ？』『俺の方は不景氣で例の芋だ』などゝ云ふ始末である、中に古狸などは、二階の窓から屋根傳へに食堂に渡るの冒險を敢てし、炊事夫に賴んで梯子で降ろして貰ひ、それから皿蕎麥を食べに行くと云ふ圖太いのもある

曾つて冒險家の一人が消燈間際に歸つて來て、狽てゝ梯子を踏外し脚を挫いて酷い目に遇つた事もあつた。

■林檎掠奪事件の結末

就床後でも尙惡戯は終熄しなかつた。そら鼾に交つて寢言のやうな體で隣室や向ふの室の者の綽名を云ふ。さうすると相手の室でも同じやうに對戰する。例へば顏に依つて名づけられた猿と猫と云ふ綽名の者が、雙方の室に相對して居ると『グウ……サール』『グウ……ネコ』と云つた風だ。夫から平常餘り用を足して呉れぬ意地惡の禿小使が、冬ならば火鉢の殘りを集めに來た時など、一室合唱で『グウ……ハア……ゲ』などゝやる。小使は打蒐かる譯にも行かんから、ブツ〳〵惡

態を吐いて歸つて了ふ。或時あの小使は餘り面憎いから、禿頭を一つ御見舞申してやらうと階子段の蔭に隱れて居て、通り蒐つたのを見濟ましし、いきなり一つコツンとやつた處が、それが間違つて禿頭舍監だつたので、素的に叱り付けられたと云ふ滑稽もあつた。

寄宿舍の直ぐ隣りは取り付けの牛乳屋であつたが、其處の畑に累々として實つて居る紅玉のやうな林檎は、秋になると何時も舍生の涎を流させた。或時舍

生の一人が、牛乳を配達して來た主人に、

『オイ、君ん所には大分林檎が生つてるが少し寄宿舍にも呉ないか？』

『エイ、あげませうとも――今年は澤山付きましたから、も少し熟したら皆さんに差上げる事にしませう。』

斯う云ふ返事を得た舍生達は、樂しみにして林檎の到來を待つてたが、一向寄越す樣子もなく其中ポツ〳〵果物商人に賣始めた。之を見た舍生は癪に障つて堪らない。牛乳屋の野郎人を騙すなら此方も料簡があると、或大雨の晩に乘じて消燈後三人の强襲隊が掠奪にと出かけた。

一人は木に登つて拷取り係、二人は下に居て拾ひ係で、ズボンの兩端を縛つたのに一杯鹵獲してから、反對の側の生垣から拔出んとする

時、牛糞を積んだ中に誤つて一人が打倒れた。此物音に牛小屋に居た一人の下僕が騙付けて來たが、五六貫もある林檎を背負てるんだから三人はどうする事も出來ない。窮餘の窮策一人が大きな聲で『生意氣をすると酷いぞ』と拳を振上げると、他の二人もウンと拳を振上げたから、下僕は其勢に呑まれて逃げ入つた暇に、三人は這々の體で引揚げて來た。

三人は若し我々と判つて掛合はれたらどうしようと、一晩殆ど寢ずで心配したが、果して翌朝主人が來て『昨晩舍生のやうな方が、私の處の林檎を取りにお出でになりはしませんでしたか』と、イヤに婉曲に持かけた。時の舍監は新しい理學士であつたが、事實ありと知つてか知らずか『其麼莫迦な事が我舍生の中にあるべき筈はない。萬一あ

つたら監督たる俺の責任だが、俺は責任を以て之を否定する。無體な事を云ふものでない、餘所を尋ねて見なさい』と、頭からきつぱり刎ね付けて追返した。

青山原の大格闘

■電車内の睨めつ競

オ、寒い——と恁う叫んで僕は車室内に飛込んだ。時はもう二三日で冬至と云ふ十二月の某日、本郷の友人の家に遊びに行つた歸途、砲兵工廠前のおでん屋で寒さ凌ぎに二合のかん酒を呷り、飯田町から新宿行電車の最終に乗つたのである。

乗客は僕の外にタツタ一人、丁度反對の側の向ふ隅に腰掛けて居る。頭には二三年前流行つて變な格好の羅紗の帽を被り、短い袴に白い緒の草履を履いた一見して書生と見ゆる二十三四の男で、荒髭の生

へてる黒い顔の間から鋭い眼の玉を光らせ、じろ〳〵と此方を見て居る。僕は何んとはなしに癪に障る奴だなと思つたから、酔眼を据えてじつと睨め返した。

元來僕は負けず嫌ひの大意地つ張りだから、何んな場所に拘らず他人と視線が合つた時などには、向ふで視線を外らす迄、飽迄見返してやるのが慣例であつた。そして又大抵の人なら此方で少時見詰めて居ると、テレ鹽梅に可笑な顔をして外處に眼を移してしまふので、之が僕には大勝利でも得たかの如く心中常に得意であつたのだが、此男は却々注文通りには降參しない。矢張同じく眼玉を据えて何時迄も此方を睨め返して居る。少しく酔が來て居る僕の眼玉は睨み負けして、やゝもすると眩しくなる位なのだ。此方は益々癪に障らざるを得ない。

生意氣な奴ー貴様如きに誰れが負けて堪るもんかと、一生懸命臍下丹田にうんと力を入れて、今度は眞剣になつて睨み付ける。向ふも其積と見えて同じくムキになつて睥睨して居る。一車他に人なく、吾等は隅と隅に陣を構へ、水入らずで睨み競べをして居るのである。

オイ一丁組まんか

ゴーと云ふ音響で不圖氣が付くと電車は知らぬ間に四谷停車場をも通過したと見えて、今しも東宮御所

下の隧道に入つたのであつた。サア失敗つた！四谷で下りるのだつたと思つたけれどももう既に遲い。よし〳〵、青山原宿には友人が自炊して居るから、信濃町から其處へ行つて泊らうと咄嗟の間に考へて、其間も勿論一秒時も油斷なく彼奴を睨まへて居る。殊に此奴の爲に四谷で降り損ねて下らぬ損をしたと益々癪に障つて堪らないから、一層猛然と目を怒らした。

電車が隧道を出た頃、彼は突如として立上つた。そしてさも傲然と僕の方に歩んで來た。見る所身の丈が五尺七寸もあらうか、肩昂り骨太く堂々として眞に好個の偉丈夫である。何の爲めか知らんと思ひ乍ら相變らず睥睨して居ると、彼は僕のすぐ前に來て突立つたまゝ、

『オイ、一丁組まんか』と太い聲で、そして何處か分らんが太く訛の

ある辯で物言ひかけた。僕は簡單なる此問が何の事か一寸解釋に苦しんだが、解し得たり！此奴睨めつこ許りでは面白くないと云ふので、腕競べをやらうかと御座つたのである。善哉面白い、此奴却々話せるぞ、喧嘩なら飯よりも好物だ。

『やらう、やらうとも……。』と意氣昂然として答へた時、丁度電車が信濃町停車場に着いた。

『サア練兵場に行つてやらう。』

僕は先に立つて下りると、彼も頷いて後について下りて來る。車掌は變な顔をして吾等を見送つて居る中、空になつた電車は烈しい勢で千駄ヶ谷の方に駛つて行つた。

改札口で二錢の乘越料を拂ふ時、彼奴の切符を見ると新宿までとし

てある。彼は僕と組打をなさんが爲に三驛手前で下車し、僕は又一驛乘越して彼と格鬪せんが爲に來たのである。

停車場を出ると寒い〳〵風が、四聯隊の方から眞向に顏も劈けよと吹付けて來る。先刻やつた燗酒のホテリも、もう何處へ行つたか今は一向に役に立たない。夜も既に十二時過ぎ、四聯隊の兵營ももう寢てしまつたと見えて燈火一つ見えない。遙かに南町口の方に當つて一つ二つ電燈の光が見ゆるのみ、廣茫たる練兵場は全く夜の黑幕に蔽はれ唯風の吹き荒むに任して居る。

■腰投げてズテンドウ

吾等は飛んで來る砂に横面を叩かれ乍ら、信濃町口から練兵場の中

を南の方へと進んだ。兩者默々として一語をも交へない。僕は腹の中で此奴多少手答があるかも知れないなど、考へて見たけれども、どうせズー躰ばかり大きくて大した腕もあるまいと、多寡を括つて悠然として歩を移す。三町ばかりで日頃覺えのある何とか變な名のある木の邊まで來たが、僕は此處が丁度好さそうだと思つたから

『この邊でやらかそうか。』と立止つて彼を顧みた。

『ウン、よからう。』と馬鹿に氣取つた勿躰ぶつた返事、其糞落着が癪に障つて堪らない。彼は先づ悠然と帽子を脱いで懷の中に疊み入れ然る後に穿いてる草履を脱いだ。僕も之を見たから下駄を脱ぎ捨てゝズッと後ろの方に押しやつた。實は下駄があると敵を苦しめる爲には頗る好適な武器となるのだけれども、一人で多人數と戰ふ場合ならばいざ知らず、一騎打で而も向ふには此武器がない場合、是を用ふるのは大に卑怯だと思つたからである。喧嘩の武士道に反して居るからである。

戰鬪準備は全く出來た、二人は暗中に睨み合つて突立つた。

突如、彼はウンと唸つて横撲りに拳を振つて來た。此方も拳を上げて素早く其手を拂ひ退け、氣合をかけて彼の横面を打撲らうとしたが

少し外れてシタタカに彼の肩を打つた。彼の拳も同時に烈しく僕の首の邊に當つた。相打ち相衝く事七八合、其中彼我の兩手は互に其帶を握り合つて、相撲ならば相四ッと云ふやうな風にガッシと許り組付いた。

間鈍いやうだけれども、雙方呼吸を入れつゝ組付いたまゝ暫らくは動かない。實は往來などで通り掛りの喧嘩なら兵は迅速を貴ぶの流で電光石火、メチャクチャに出來る丈手早くぶん毆つた上、ドン〳〵逃げてしまふのが最上の秘訣であるけれども、斯の如く堂々相約して格鬪する以上は、恁う云ふ姿に入るのは先づ型なのである。

動かざる事一分時餘、彼は機熟したと見たかオーとおめいて猛烈な腰投を打つた。腕の力腰の力實に驚く程強い。僕は一寸耐へたけれ

ども及ばず、躰は容易く引上げられて彼の腰の上に、足は空に飜へつて美事に投げ付けられた。

闘その腕力の強い事

殘念！　僕は恰も臼に組敷かれた猿の如くに、組敷かれてしまつた。彼の躰軀は頗る重い。そしてウン〳〵滿身の力を罩めて上から押付ける。僕たるもの豈苦しからざるを得んやとも洒落られぬ處、實にみじめなざまである。併しムザ〳〵斯く組敷かれたまゝ降參し終るやうでは、先祖に對して申譯がない。口惜しいと云ふ一念で、丁度彼が腹の上に乘かつて居るのを幸ひ、滿身の力を腰と腹に入れて、ウンと許りに刎け上げた。サシモの彼もグラリとして前の方にノメリかゝつ

たので、得たりと敏捷く彼の股を拔け、後ろから今度は此方で乘りかぶさる。そして思ひ知れとばかり、頭と云はず、首と云はず、滅茶々々に押付ける、毆り付ける。愉快々々、今は全く位置を轉倒して、僕は勝者の地位に立つた。併し決して油斷は出來ぬ。前車の覆へるは後車の戒めと、僕は成丈頭の方に乘跨がつて、刎返されるに備ひ、是でもか〳〵と盛んに攻め付ける。彼は暫く僕の爲すがまゝにして居たが、兩手を地に突張つて、ジリ〳〵と首を後

ろに引くや、さはさせずと押へる我手を振拂つて、アハヤ立上らんとする。之は大變、マゴ〳〵して居ると、又組敷かれると思つたから、思切りよく前に飛のいて、振返りざま身構ると、彼も仁王立になり、兩手を擧げて打振り〳〵、風も生せんばかりの拳を猛烈に我面上目がけて飛ばして來る。其力たるや、實に馬鹿々々しく強い。大概の拳は此方でも拳を振つて打拂ふが、手答が實に烈しくて、ウッカリして居ると受け疲れそう。此場合受身になつて居るのは、斯麽剛力に遇つては全く止むを得ぬとしても、策の得たるものではないから、毆られる覺悟で此方も向ふを毆り付けやうと咄嗟に策戰方法を變じ、亂下する彼の拳を潛り〳〵盛に横面の邊に向つて拳を振ふ。彼は力があつても敏捷と云ふ點では僕より數等劣つて居るから、命中の度は僕の方がズ

ッと多い。此方が二ッに、向ふが一ッ位の割だから、得たりと飛鳥の如くに跳廻り、或は前、或は後ろと盛に彼をかけ惱ます。其間に、此方も大分毆り付けられたのは勿論だが、斯う云ふ場合には痛くも痒くもなんともない。彼も同樣何ともないだらうけれども、此方が烈しく活動するので餘程持餘した態に見えたが、之では組敷くに利あると見たか、飛蒐る拳の下を潛つて僕の腰に抱付いて來た。之は不覺と手で突きのけやうとしたけれども、時既に遲く、彼は滿身の力を罩め、大きい體でウンと鯖折をかけたから堪らぬ。一寸外掛に防いで見たけれども、其甲斐あらばこそ。朽木の倒れるが如く、二人重なつて、そして僕が下になつて頭轉倒と打倒れた。

入齒で嚙んだ二本指

彼は此奴と唸り様前回に懲りて跳返されぬやう打被さり、左の手で僕の咽喉を扼し、右手を振つて顔と云はず、頭と云はず、亂暴に突いて來る。苦しいのと、痛いのと、今は先に組敷かれた時よりも參つたが、向の背中に取付いてる手を拔くにも拔かれず、僅かに一方の手で突いて來る手を打拂ひ、之は最早運の盡かと觀念しかけた所を、天未だ我を見捨給はず、彼の躰が少しく横の方に傾きかゝつたので、疲れ切つた手と腰にありつたけの力を入れ、ヤッと右に引張つた所が、機みがよかつたと見え、折重なつたまゝ二人の躰がゴロ〳〵。地盤が傾斜して居たせいか、上になり下になり、二回ばかり回轉したが、

丁度我輩が上になつた時、バシャッと云ふ音がして水溜りに轉げ込んだ。泥水がバッとほど走つて、目鼻の邊にかゝつたのには、一寸閉口したけれども、此處で上になつたら占めたもの　もう負けぬぞと前にやられた通り押掛つて彼の頭を小突く。彼も下は泥の中、上は我輩の辣手に突付けらるゝ苦しさに、無茶苦茶兩手を突張つて僕の口のあたりを突かける。其中指を二本ばかり咽佛に屆くほど押入れられたのでムッと呼吸が詰つたのを、ウンと思切り嚙付くと、彼も其痛さに狼狽てゝ引拔いたが、其引拔いた指と共に喰ひ付いた上齒の入齒が一緒に口の中から引出されて、どこかへ飛んでしまつた。此時彼は何と思つたか、

『モウ、よそうか。』と例の豪傑聲で叫んだ。

彼は下に組敷かれつゝ、恁う叫んだのだ。チッども憐れつぽい聲ではないけれど、確かに降服か、請和の聲と聞いてよい。實は僕も上には跨がつて居るものゝ、殆ど精力が盡きかけたから、若しこゝて引繰返されでもすると、モウ到底之以上の力を出して回復する事が出來そうもない。丁度見切り所だと思つたから、

『ヨシ、許してやる。』と、押へ付けた手を離して立上る。彼も泥の中から這出して來て、少時相對して立つたが、

『貴樣ア、却々やるな。』

『イヤ、貴樣も隨分やるぞ。』と、僕も覺えず褒めてしまふ。不圖見ると、腰から下が全然泥塗れになつて居る。

『オイ、貴樣の背中ア泥だらけになつたぞ。』

『ウン、中まで浸通つた。併し貴樣齒を何うかしなかつたか。』

■大事な物を落した

如何にもと心付いて手をやつて見ると二枚ガラ開きになつて居る。之も三年ばかり前喧嘩をやつ付けた時、下駄で毆られて折つちまつたので、一度入齒をしたのを矢張又喧嘩で落つことし、『今度こそは、何うしても落さない、若し落したら、もう拵いて貰ひません』と云ふ條件で、親爺に十何圓かを奮發させて作つたのである。

『ア、失敗つた落しちやつた、併しまあいゝや……。それよりか君あ指を痛くしたらう。』

『ナアニ、大した事はない。が、僕あ大事なものを落した。』

聞いて見ると、彼は先頃海軍兵學校を卒業し、近々中に横須賀を發して遠洋航海の途に上る筈で、其前に賜暇を得て東京へ遊びに來て居るのだが、落したと云ふのは、何でも職務に關する任命書なのだそうで、財布に入れてあつたとのことだ。

『アレを失すと大失躰になるんだ。』と、流石に困つたやうに云ふ。

僕等はもう先刻の喧嘩は忘れて、以心傳心に、何となくかう友達のやうな氣がする。僕はそれは嘸困る

事だらうと一生懸命手探りに地の上を捜したけれども、何せ眞闇な夜であるし、方々と摺廻つて、何處へ落したと云ふ見當もないから、何うしても見付からない。約三十分許り尋ねたが、迚も燈りでもなくては、見付かりそうもないので、之は提灯を借りて來て捜すに如かずと其事を彼に話し、場所によく覺を付け、履物だけは見付て、二人で青山原宿の友達の所へと出掛けた。

今迄は暑いも寒いも忘れ果てゝ居たが、障害もない廣場を猛烈に吹付けて來る風は、何とも云はれず寒い。加之に腰から下は水溜に入つて居るから、骨を剔られるやうである。彼は背中がビショ濡れだから僕よりもモット酷いに違ひないが、何とも云はず默々として僕の跡に付いて來る。何と奇妙な道連れであらう。

■友人の家で鼎座快談

四聯隊の横を通り、通り路の家犬に三四度吠付かれて友達の家へ着いて見ると、もう疾うに寢たものと見え、戸が閉まつて、家の中が眞闇だ。氣の毒だけども、ドン〳〵表を叩くと、暫くして『誰だい』とランプを點けて起きて來る。戸を開きざま、僕の風躰を見て、

『ア、貴樣か、ナンダひどい鼻血を出して……、又やつたな。』と、目を轉じて後に居る彼に氣が付き、チョッと頭を下げる。彼も、ッと頭を下げる。僕は始めて氣が付いて鼻血を拭きつゝ、何にも構はず、簡單に事の仔細を打明けた。

『そうか、ソンなら身仕度をして出かけやう、マア内へ入れ。』と云ふ

譯で、二人とも濡れた着物を脱ぎ、僕は友の小夜着を、彼は友の單物だの古襯衣だのを襲ね着し、提灯を下げて今度は三人連れで、青山の原へ出掛ける。

先刻の所へ着いて、燈りを便りに三人掛りで搜すと、稍少時してから幸ひにも彼の財布が見付かつた。彼は大に喜んで、是非僕の入齒も見付けなくては濟まぬと、僕が諦らめてもういゝからと云つたにも拘らず、一生懸命に搜したが、とう〳〵判らずに又も原宿へ戻る事となつた。

歸り途に彼はとある酒屋を無理々々叩き起して、酒を三升程買求め尙露店のおでんを有丈買つて、原宿の内へ持つて來らせ、之をおかづに三人鼎座して酒盛を始めた。時に午前三時、一番鷄の聲が近處に聞

える。

たが、目が覺めるや彼は『ソンナラ失敬する』と云ひ樣、飄然として立

相對して見ると、始め憎いと思つた髯面も却つて愛嬌がある。話は電車内の事から始まつて『君も強いぞ』『イヤ君も手剛い』など、果は三人身の上話迄腹藏なく語り、何等胸中に隔てなく恰も十年の知己の如くになつた。且飲み且語り、朝の七時頃まで三升の酒を殘り少なにやつつけてしまひ、夫から三人肱を枕に他愛もなく晝頃まで眠つ

去つた。

■嗚呼何等の悲痛ぞ

其後僕等は肝膽相照す親友となつた。遠洋航海中には、港毎に音信をして呉れ、歸つた時にはお土産だと云つて南洋の木の實酒を送つて寄越した。間もなく彼は少尉に進み、戰艦敷島の乘組となつたが、折しも日露國際の風雲頻る急な時で『今度こそは力のあるつたけ戰つて何時ぞや貴樣に負けた不名譽を回復するぞ。金鵄勳章は欲しくないが靖國神社の神樣になりたい』などゝ、終終勇ましい事を云つて寄越して、僕を微笑せしめた。然るに愈々其乘艦が横須賀を解纜して、黄海方面に出動しやうと云ふ前日、出發準備の爲部下と共に檣上に上つて

作業の指揮をして居た所、何等の悲運ぞ、彼は誤つて數十尺の高處より墜落し、身躰が膾のやうに碎けて其まゝ即死したのである。

此事は暫く經つてから僕の耳に入いつたが、此事を聞いた時は僕は内に籠つて二日許り泣暮した。彼の同輩は或は生きて金鵄勳章を貰つたものもあれば、或は死んで靖國神社の神となつたものもある。然るに彼は、靖國神社に祀られるどころか、新聞の片端に其名が現はれさへもしなかつた。

アヽ、どんなに彼は口惜しかつたらうぞ……。僕は今でも彼の事を考へる毎に、涙がこぼれてたまらない。

春浪君等の引致

半田對飛田の相撲

六年ばかり前の初夏の事である。

今、福岡大學に柔道の師範をして居る四段半田義麿君が、前任地の鹿兒島造士館に赴任する事となり、天狗倶樂部の送別會が上野の大阪料理丸萬に催された。會がやゝ突然に行はれた爲め、集まつた者は半田君の外に押川春浪君、山田敏行君、飛田忠順君、赤堀秀雄君及び小生の五六人だけ、人數は甚だ揃はない。被送別者に對し氣の毒なやうに思ひ乍ら盃を重ねたが、其中敏行君の浪花節が出る飛田君が磯節

を唸る、其他も出鱈目に大聲を出す、果は腕相撲、坐り相撲の力競べから、とう〳〵立上つて本相撲とまで發展し、人數こそ少けれ、騷ぎ方に於ては非常な盛會を現出した。

春浪對小鰐の引搔き合ひの相撲、山田對半田の柔道式相撲、屏風を倒し、德利を覆へし、女中を顰蹙せしむる事數番の後、飛田君が蹌々踉々たる足を踏しめて半田君に戰ひを挑んだ。

そも飛田君は、其前年の冬天狗對一高の相撲試合に常陸山と名乘つて出戰し、其肥大な體軀と横綱の名を借りた自負とは、必ずや偉勳を現はすだらうと豫望されたが、一勝も得ずに五番丸負の失敗に終つて其後大分仲間から冷かされて居た。其時半田君は負傷した三島君の代理として初めて天狗相撲に出戰し、潑溂たる手捌きで見事に數番の勝

を得、喝采を博したのであつたが、飛田君の腹としては、短軀な半田君ぐらゐに劣りはせぬとの考へがあつたであらう。殊に負嫌ひな天狗の中でも有數な負嫌ひだから、一つ此半田君と力を角して武勇の程を表はし、一番名譽を恢復しようとも思つたらしい。

さて雙方立上つて暫くの間揉合つたが軈て半田君が腰投のやうなものをかけると、兩人獅嚙付いたまゝズ

ドンと同體に倒れた。其機みにボリッと妙な音がしたと思ふと、飛田君は『ア痛いッ』と右の肩を押へて、顔をシカめ乍ら起き上つたが、右の手がダラリと下がつて上に揚げる事が出來ない。偖は機みに肩を拔いたのだと、一同流石に大に驚き、山田半田の兩君は柔道で覺えの手術を加へる。やう〳〵嵌まるには嵌つたが、餘程疼痛が太い樣子だ。强情我慢の飛田君は平氣な顔で『もつとやらう』と豪語してるけれども時間も既に遲し、飛田君には赤堀君が付添ひ俥で牛込の家に歸す事となり、一同丸萬の門を出た。

まださうならうとは思はなかつたに、夜も既に十二時を過ぎ、電車はとうになくなつて居る。四人はしよう事なしに、唯ブラ〳〵廣小路の方に歩みを向けた。

偖も見事な腰投よ

ホテる顔を快い夜風に吹かれ乍ら三橋の所まで來ると、道傍に四五人の人だかりがして、洋服の男が俥屋と何か聲高に言合ひをして居る俥屋は年の若い苦學生でもあるかと思はれる男で、何か頻りに歎願してる樣子だが、洋服は傲然として之を叱咤し、其上口穢く惡罵を加へる。

『莫迦な事を云ふなッ、貴樣の方が惡いのに、難癖を付けて俺を强請らうとするんだらう。俺は△△新聞の記者だ、俥屋風情が小癪な事を吐すと許さないぞッ。』

『イヤ强請らうの何のと云ふ譯ではありません。あんなに泥除けを毀

されては、俥を借りてる私が償はなくてはなりませんから。其金の半分丈けでも頂きたいと申すんです。』

『馬鹿野郎、一文だつて貴様になぞやつて堪るもんか。それでいけなければ警察へ來い、署長に云つて貴様のやうな奴は酷い目に會はせてやる。』

話の内容はよく判らぬが、俥屋の哀願的なのに對して、洋服の態度や言語の憎々しいつたらない。聞いて居た春浪君は堪らず俥屋に近づいて譯を訊ねた。

『一體どうしたと云ふんだ、お前が此人に何か惡い事でもしたのか？』

俥屋は一寸躊躇したが『イエ、今そこの狹い通りで、行違ひがしらに此方と突當つたんです。すると此方が怒つて俥の泥除を毀したんで——。』

話半ばに件の男は横から遮つた。『君は一體誰れだ、いらん所へ出て來なくともいゝ、引込んで居ろ。』

『默れ、俺は勝手に此俥屋と話してるんだ、お前こそ引込んで居ろ。』

『何んだと此書生ッポ、生意氣な、貴様などの出る幕ぢやないッ。』

彼は薩摩絣の着物に袴を穿いてる春浪君を、一介の書生と見たものらしい、そして痩ぎすな小柄なのを與し易しと思つたか、斯う云つて春浪君の肩を激しく突付いた。

氣早な春浪君が何條默つて居るべき。『ナニッ』と叫びさま飛蒐らうとしたが、先刻からムヅ〳〵して居た山田君は同時に飛出して、番傘を片手に片手で彼を捉まへるより早く得意の腰投を喫はせた。彼は投り付けられた犬ころのやうに、三度許りクル〳〵と地上に廻轉して起上る處を、追縋つて又一發。又クル〳〵と廻つて起上る處を更に一發、最後に起上るや彼は一目散に廣小路の方に走つて、とある路次に姿を隱して了つた。

■俥夫に金二圓進上

目にも止まらぬ早業とは實際彼麼のを云ふのであらう。最初に飛蒐つた本人の春浪君が、手を下す隙のない中に、よくも彼麼に利くものだと思はれる程、大の男を手玉に取つて三度迄も投付けた。俥屋始め見て居た彌次連も呆氣に取られて驚嘆して居たが、春浪君だけは少々不服である。

『山田は餘計な事をする、折角俺が投げてやらうと思つてるのに、横合から出て來やがつて……。』

『ハ、、、、お前なんかぢや迚も駄目だよ、アベコベにやられて了ふ。』

『莫迦云へ、彼麼奴なら四五人は投付けて見せるんだつたが……。』

而し當の敵は逃げて了つたので、もう仕方がない。春浪君は懷中から一圓紙幣を二枚取出して、俥夫を麾いだ。

『俺が捉まへて談判しようとしてるのを彼奴（山田君を指す）が餘計な事をしたもんだから、逃がして了つた。取損ねた辨償は俺が代りに拂つてやるから、まあ勘辨して呉れ。』

『イヽエどう致しまして――私はあれで全然胸が透きました。其上にお金などを頂く譯はありませんから……。』

『それでもお前は損をしなくてはなるまい、遠慮せずに取つて置け。』

『でも此お金はどうも……。』

『愚圖々々云ふなッ、取れと云つたら取つて置かんかッ。』

春浪君は面倒臭くなると、よくかう怒鳴り付けて人を壓服する事が

あつた。利益になるやうに威かされるのだから、俥屋はモジ〳〵し乍ら三拜九拜して其金を受取ると、來て居た俥夫仲間のものも代る〳〵出て禮を云つた。一同は彌次馬のいろ〳〵な評語を後にしてサッサと切通し下の方に歩き出した。

時計を見ればもう一時過ぎである。何れも牛込や麴町など遠い處に住んでゐるのだが、電車は勿論ないし、皆の財布を集めても俥代に足りないから、兎も角此邊で電車の通る頃まで待つ事にしようと、松阪屋前のおでん屋に入る事にした。

■眞夜中の柔道試合

おでん屋でも大分飲つたが、待つ時は長いもので、いヽ加減經つた

と思つてもまだ三時にもならない。とても此先二時間餘りもこゝで立ち暮せないからと云ふので、湯島天神下に道場を開いて居る、舊早大の柔道師範井上（縫太郎）三段を叩き起して見ようと云ふ事になり、若干の瓶酒を携へておでん屋を辭し、眞夜中の三時頃、井上道場を訪ねた。

遠慮なしにドン〳〵表の戸を叩き付けると、漸くの事で井上氏自身で起きて來た。時でもない時の訪問に一寸驚いたやうであつたが、譯を話して夜の明けるまで置いて貰いに來たと云ふと、快諾して直ちに道場内の一段高い處に招じられ、五人車座になつて又持參の酒が始まつた。

井上氏が臺所に行つて何彼と下物を見付け出して來る、話が色々は

づんで一同少しも眠むさうにもない。其中話が發展して山田君と小生とが、眞夜中に柔道試合を行ふと云ふ騷ぎになつた。それはかうである。

豫て僕は山田君に對して『君が如何に三段の腕前があつても、僕が防ぎ一方で行つたら、勿論勝てはせぬが負けはしない』と天狗式聲言をして居つた。山田君は元より素人の僕如き何の譯もないと思つてるから、それではいつか勝負をしようと云ふ事に約束してあつたが、今夜圖らずも其時機が到來したのである。他の三人は『やれや

れ』と唆しかけるから、兩人は吊してある稽古着を借りて、愈よ茲に對戰する事になつた。

僕と雖も地方の中學時代に多少の經驗はあるし、曾ては太田中學の遠征に力一方で七人を投げ飛ばした事もある。而し逆や押へ込みをやられては敵はぬから、山田君の方は投げ一方と云ふ條件付とし、何でも彼でも腰を引いて、業をかけられさうな時は疊に膝を突いて防ぐ。半田四段、井上三段、春浪無段が盃を取交し乍らの審判役で、師範臺から勝手な批評やら聲援やらをする。體や力では山田君に劣らぬ積りだし、一生懸命後生大事と手を突張つて防禦してるのだから、流石に山田君も術の下しやうがない。それに押込と逆が封じられてるから、とう〳〵投付けられるのを免れ、其中酒の蒸氣が、五體から噴出して

來たので、結局取疲れ引分けの、聲言に於ては僕の方が勝と云ふ事になつた。

如何に道場でも、近所合壁では眞夜中のドタンバタンに、嘸驚いた事であつたらう。

巡査と同行の四人

六時頃井上道場を辭してから上野の山でも散歩しやうと、ブラ〳〵山下に差蒐つた。すると其處の交番の巡査が我々を見て、ツカ〳〵駈寄つて來た。

『君達は昨晩三橋の邊で何かやつたと云ふ連中ではないかネ。』

先頭に居た春浪君は言下に『さうです我々です——が、それがどう

かしましたか。』

『さうか、夫れに就て昨晩本署から電話があつた、兎に角本署迄一緒に來て貰はう。』

『ハヽア、來いと云へば行きますが、一體どうした譯なんですか。』

巡査は四人の風態を見上げ見下して居たが、何だか變な微笑をして

『ナニネ、昨晩三橋附近に追剝が出たと訴へがあつたんださうだ。僕の管轄で知らずに居たと注意されたから、先刻から捜して居たんだ。』

僕等は『追剝』と云ふ言葉の、突飛極まるのに思はず聲を揚げて笑つたが、巡査の方では早速に交番の始末をして『兎に角行つて貰はう』と横手に蹤いて歩き出した。四人は『追剝』の解釋に就て笑語し乍ら、素直に同行した。

巡査は署内の腰掛に我々を待たせて置いて奥の室に入つたが、間もなくモールの肩章を付けた若々しい警部が出て來て、一段高い所から我々に對した。半田君などは卓子の上にあつた朝刊を引出して、呑氣に讀んで居たが、此警部何と云ふかと思つて、新聞を置いて其顔を注視した。

『〇〇新聞記者の某と云ふものから、昨夜十二時頃三橋で書生體の追剝に會ひ、五十幾錢入の財布と、眼鏡を强奪されたと云ふ訴へが出て居るが、君達は何か其樣な事をやつたではないか。』

追剝の問題は益々突飛になつて來る。僕等は可笑しいのを嚙耐へて居ると、警部は更に附加へた『當方でも俥夫に就て概略を調べたが、實際財布や眼鏡を取つたのか。』

君等の職業性名は？

春浪君は得意の辯を以て說明役に當り前後の事情を殘らず語つた上、向ふの男の暴慢非理な事をも痛擊した。警部も時々微笑し乍ら聞いて居たが、春浪君の演述が終ると『して君達の職業姓名は？』と尋ねた。

之に對する春浪君の笑がいゝ。一々三人を指して『之は鹿兒島造士館柔道師範四段半田義麿君、次は三段山田敏行君、次は初段弓館小鰐君』と素人の僕に初段のお負けをして、最後に『僕は武俠世界記者押川

春浪です。』

之を聞いた警部は一寸驚いた樣子であつたが、俄に言葉を改めて『ハヽア押川さんでしたか、道理で何處かで御目に懸つたと思つた。確か一二年前不忍の運動會（註に曰く之は春浪君の冒險世界時代に開催）に參つた時御目に懸つたんです。私は學校時代から貴君の大の愛讀者ですよ。——夜でも晝のやうに明るい三橋邊に追剝なんて、どうせ斯麼事だらうと思つたんです。屹度其男が財布や眼鏡を落して、口惜し紛れに出鱈目の訴へをしたんでせう。ハヽヽヽ之は失禮しました、何卒惡しからず……。』

春浪君も斯うなると益々勢に乘せざるを得ない。『彼麼怪しからん奴は宜しく取締つて下さい。眞の新聞記者かどうか、彼社の社長に電

話で聞いて見ませうか。』

『イヤ夫は又充分私の方で取締ります、實際此樣惡い奴は大に懲らして下さるのがいゝんです。有段者の方々に遇つては嘸酷い目に遇はされましたらう、ハヽヽ痛快でしたナ、丁度貴君の小說にでもあるやうですナア。』

四人は無暗に賞められて、却つて極りが惡くなり、笑ひ乍ら警察を辭した。

小學時代のある正月

門松の上に積る白雪

東京では正月の元日に雪のある事などは珍らしいが、僕の故郷の方の北國では、正月の廻禮に藁で拵へた雪靴を履いて歩かねばならぬやうな事がある。

僕が高等小學校の四年生の時だ。其年の正月は大晦日の晝頃から雪が降り續いて、元日の朝にはもう根雪とも三尺以上も積つて居た。僕は朝のお雜煮を祝つてから、近所の友達と連れ立つて、雪の中を學校で行はれる四方拜の式に出かけた。町の軒々には雪のかゝつた門松の

上に國旗が寒風に飜る。外套や頭巾に體を包んだ赤い顏の年賀客が彼方此方を通る。いつもと違つて小ザッパリした裝束をした學校友達がいづれも嬉しさうな顏をして道々同伴になつて來る。雪に閉ぢ籠められてゐる北國の町にも、流石に元旦らしい何となく晴々した氣色が浮いて居た。

學校は舊城趾の長い坂道を登つた高臺の上にあつた。坂を登つてから二三町の間は、丸で掩蔽物のない吹つ曝しの道を通らなくてはならない。横手からはひどい勢で吹雪が吹き付ける。道と云つても殆ど雪に埋もれて、前に人が歩いた足跡を辿つて行くのだから、時々深みに踏込んではスポリと轉ぶ。首筋やら袖口から、雪の粉が體に冷たく溶け込むが、平常雪には馴れて居るし、それに元氣な少年の頃だから、

別段に寒いとも苦しいとも感ぜぬ。寧そ風と雪に元氣を唆られて今日之から學校で唱ふべき『年の始めのためしとて、終りなき世の目出たさを、松竹立て丶門毎に、祝ふ今日こそ樂しけれ』と云ふ唱歌を高らかに合唱し乍ら猛進する。

女生徒はまだ海老茶袴などを穿かぬ頃で、男と同じやうに脚絆や股引に雪靴を履き、頭を頭巾で包んだ丈で吹雪の中を通つて居るが、流石に女生徒等は道に惱んで居るのを、どん〳〵後から追越すのは男

先徒の小さな矜りであつた。

恐しい樣な樂い樣な

此日學校に出るのは、正月の祝賀の式の爲ばかりでなく、生徒には も一つ非常な樂しみがあつた。それは此日に第二學期の小試驗の成績が發表されるからで、生徒に執つては浦島太郎の玉手箱よりも、之を見るのが樂しみだつた。

僕は此年の春中學の入學試驗を受ける積りで、其準備として前月の初めからN先生の家に通ひ、同じ目的の五六人と共に算術や讀書の豫習を受けて居た。それで此小試驗には入學試驗の運だめしの積りで一生懸命に勉强してかゝつたのだから、殊更に待遠でならない。自分では

隨分よく出來た積りだけれども、自分より上席の二人もカナリ勉强したやうだつたから、屹度好成績だつたに違ひない。若しあの二人を拔いて自分が一番になつたら、どんなにか愉快だらう。而し萬一出來が惡くつて却つて席順が下りでもしたら、第一お父さんやN先生に面目がないし、今度は一番になつて見せると威張つてやつた弟達にも具合が惡い。どうかして自分の名が眞先に出て居て呉れゝばいゝがなあと、小さな胸が恐ろしいやうな樂しいやうな思ひで一杯になつてる。

ワイ〳〵騷ぎ乍ら雪の中を飛んで行く道々も、それ〴〵の豫想を懷いて居ぬものはないのである。

雪除けの爲に葭簀を張り廻してる薄暗い控所には、もう大分生徒が集つて居た。各組に一つ宛割當てられてる大きな火鉢の周圍には、ど

れにも蟻のやうにたかつて、冷たい手足や眞赤になつてる鼻や耳を温めやうとする。割込まうとして後から押すもの、頑張つて占領した火の端を保たうとするもの、數個の火鉢を中心にして叫ぶ聲、笑ふ聲、泣く聲、其騷々しさは一通りでない。葭簀が廻してある丈けで、別に戸障子と云ふものがなく、戸外の寒い風がどん〳〵吹き込んで來るがかうやつて押しつ押されつしてる間に、冷え切つた體もどうかかうか温かになつて來る。先生の中にはもう朝の祝酒の爲か顔を赤くしてるのもあつて、いつもはやかしましやの先生も、今日は立派な羽織袴に納まり返つて、別に騷々しい生徒を叱らうともせぬ。小使迄が新しい袷被にメカシ込んで、併し吉例の水鼻を垂らし乍ら、孫のやうな生徒に御目出たうがすなど〻愛嬌を振蒔いてるのも、目出たい元日の一景

であつた。

可憐な式場の光景

號鐘を合圖に先生が控所にやつて來て各受持の組を纏め、順次式場に導いて行く。校長先生は縁を取つたフロックを勿體らしく着なして式壇の横に立ち、傍のオルガンには女教師が氣取つた指先でマーチを奏で、入場する生徒の足拍子を取つて居る。式壇の正面に掲げられてあるのは、三大節毎に拜する　兩陛下の御眞影で、其御前に立つた一同は、子供心にも崇高嚴肅の氣に打たれて、咳も聲高にはしない。式場は暫らく寂として、唯障子の破穴を鳴らす風の音のみが、際立つて高く聞える。

最敬禮、君ケ代合唱、勅語奉讀、四方拜の歌合唱と云ふやうな順序が終ると、御眞影の前の扉と幕が閉され、恒例の通り校長の訓話が始まる。生徒は暫らく佇立してるので、手足の先が凍えて來るし、それに第一は之から掲示される試驗の成績が氣になつて來て、長々しい訓話などは碌々耳に入らない。互に目で話し合つたり、肘で隣りの兒を突いたりする事が始まる。殊に今度の試驗がいつもより心配になる僕は、早くお話が濟めばいゝなと祈り乍ら、其でも窃に前列の友達の帶を引張やうな惡戯を忘れなかつた。

訓話が濟んで式が全く終ると列をなして又控所に歸り、先生は『別れ』の號令をかけてから、各々教員室へ成績の掲示を取りに行く。と間もなく卷いた紙を持つて來て高い處に張り始める。先生が背延びし

て張る後に、生徒も色々な心を抱き乍ら背延びして、自分の名を見出さうとする。丸で魂が其掲示紙に吸取られるやうな有樣である。何たる眞面目なそして可憐なる光景であらう。

■僕の名が第一席に

卷いた紙が始めの方からクル〳〵擴げられた瞬間、僕はボーッとして頭の周圍が濃い霧に包まれたやうな氣になつた。果然、果然、僕は名が正に第一席に記されて、是迄の上席の生徒の名が其後の方に認められるではないか。級中の誰彼が『ヤア△△さんが一番になつた』『ホー、ほんにさうだ——偉いナ、偉いナア』などゝ驚歎の聲や羨望の目を八方から注がれるが、自分には何が何だか暫くの間意識がハッキリ

して來ない。漸くそれが明かに感得されて、嬉しさが胸に込み上げて來ると同時に、今度は何だか人に顔を見られのが、羞づかしいやうな氣になつて、わざと級の群から遠ざかり、丁度一年の方に弟が居たのを幸ひ、其側に行つて他には聞えぬやうに吩咐けた。

『オイ、兄さんが一番になつたぞ、早く内に歸つてお父さんやお母さんにさう云つて報らせるんだ――。』

『エ、眞實かい――ヤ本當になつたんだネ。僕も今度は前よりか八番上つたぜ。』

弟も大得意で元氣よく他の友達と一緒に歸つて行つた。僕は漸く普通の時のやうに落着いて、取殘されてある火鉢に獨り手を翳し乍ら、皆の後の方から他の人の席順をも望み得るやうな餘裕が出來た。あゝ

俺はとう〳〵一番になつたんだ、愉快だなあ〳〵。

軈て級の者は皆火鉢の邊に集まつて來て得意なもの失意なもの、千態萬狀な言葉が交された。他の組の生徒等が最上級の第一席に僕の名を發見して、それから僕の顔を一群の間に物色するやうな時は、心中何とも云へず得意であつた。四年生の一番、云はゞ學校中での一番はこゝに居るこの僕だ。之からよく僕の顔を覺えて居て、ウンと尊敬するんだぞ。あゝ向ふにN先生が見える、今度夜學に行つた時何と云つて賞めて下さるか知らん。今日内に歸つたら内の人達はどんなにか喜ぶだらう。東京の大學に行つてる伯父さんは、一番になつたら立派な綉褒美を買つて寄越すと云つて居たが、どんなものを請求してやらうか知らん。考へはそれから夫れと移つて行つて、名譽と光榮が唯自分の

周圍にのみ渦を卷いてるやうな氣がする。

■勇壯なチョッ切遊び

試驗の話も大分下火になつて、そろそろ歸り仕度にかゝる頃、誰か『チョッ切り』をして遊んでから歸らうぢやないかと動議した。晳く學校を休んで居て、之から又數日休暇である生徒仲間には、學校に於ての遊戯慾が盛んであつたから、直樣此動議が可決された。

此『チョッ切り』と云ふのは此小學校獨特の遊びて、他の何處の學校にもなかつたものかも知れない。雪國の學校の冬の遊戯としては、戸外では滑り競か雪合戰位のものたであつが、屋内では休みの時間毎によくこのチョッ切をして遊んだ。それは生徒が適宜に二組に分れて一

方の手を楯の代りの防禦に使ひ、一方の手で互に敵の頭を叩くので手が頭髪の一部にでも觸れば、觸られた方が討死となつて戰ふ權利を失ひ、斯くして全部討死した方が負けとなるのである。天下に之以上單純な遊びがないと思はれる程、單純なそしてカナリ蠻的なものだが、それでも此學校では最も面白い團體競技として、常に之が行はれた。

我々四年級は同數宛二組に分れて、控所の兩端に相對陣した。最初の中は一騎討から衝突が開かれるが、互に兵を繰出し合つていつか大混戰となつて了ふ。平常斯麽競技にはどうしても負ける事を嫌ひな僕は殊に今日級の首席になつて一層氣を負つて居るから、全身の元氣と且あらゆる秘術を盡して奮鬪し、敵方の豪の者一二人を打破つてとう敵味方共生殘つた一人宛の決戰となつた。而も敵は平常級中で僕とは仲のよくない力自慢の生徒であつたから、互に平日の敵愾心迄手傳ひ、殆ど喧嘩のやうな風に烈しく戰つたが、勝負の明かでない事が三四度、相打ちが二三度あつた後、とう〳〵先生が廻つて來た爲に引分けに終る事となつた。此時の必死の奮戰は其後も友達の話に上つた程猛烈なものであつたが、何しろこの『チョッ切り』ぐらゐ簡單でそし

て痛快な競技は又と他に類があるまいと思ふ位、僕は此蠻的な快味を思ひ出して、今でもやつて見たいやうな氣がするのである。

■アゝ俺は跛になつた

雪が小歇みになつたし、もう晝近くになつて雜煮の腹も大方空いて來たから、一同は各々學校を出て歸途に就いた。例の坂道の處迄來ると、雪道は堅められて大理石のやうに光り、先きに歸つた子供等は其上を鍬を打つた下駄で、勢よく滑つて遊んで居る。僕は坂の上にある文房具屋で、豫て預けてある鍬の下駄と是迄の藁鞜とを履替へ、ハーラハラ〳〵と行人を叱咤して避けさせ乍ら、凍つてる道を飛ぶがやうにして家の門前迄來た。そして家の外から『お母さん、僕ア一番にな

りましたよ』とする時――。

此時である。滑走して來た僕は路上の凸所に躓いて劇しく横様に轉倒した。其時足がミリッと音がしたやうに思つたが、併し何の氣なしに直ぐ起上らうとすると、左の足の爪先がグルリと後向きになるやうに廻つて、同時にペタリと又雪の中に倒れた。ハッと思ふと息が詰るやうな名狀し難き劇痛を覺えて『俺は跛になつたんだ』と云ふ感じが電光の如く頭の中に閃いた。一分二分三分五分――僕は全く失神した人のやうになつて聲も立てずに、雪の中に倒れたまゝで居たが、其處へ近所に住む鶴松と云ふ低能な若者が通りかゝて、僕を玄關まで擔ぎ込んで何とも云はずに歸つて行つた。僕は此時始めて『お母さん』と悲痛な聲を出して叫んだ。

僕は倒れた機みに左の脛を挫折したのであつた。芽出度い元旦の眞晝、而も學校で好成績を得た我子の歸りを喜んで待つて居た父母に、此出來事は何たる大驚愕であつたらう。田舍町の事とて唯ヨヂームを塗つて繃帶をする位の醫者しかなく、一日二晩劇痛に泣いた後、漸く近在から伯樂を本職にしてる『骨接ぎ』を見付けて之を招ぎ、脛に板片を當てゝ結へ付けて置く接骨術を施して貰つたが、結果はどうなるか此男にも判らない。正月元日から雪の解けかゝる三月の中頃まで、不具になりはせぬかと云ふ心配に圍

まれつゝ床の中に臥たきりであつたが、幸ひに跛となる事を免れ、どうやら杖に縋つて座敷の中を歩み得るやうになつた。

其中に中學の入學試驗が來た。見舞に來た友達などから受驗すると云ふ話を聞かされては、迚もジッとしては居られなかつた。僕は内の人達が止めるのも肯かず、無理矢理乞うて俥に乘せられ郡役所の試驗場に出頭した。それが末席乍ら幸ひにも合格して入學許可の通知を得た時は、どんなに嬉しい事であつたらう。母は『よく及第した、それよりもよく癒つて呉れた』と涙を流して喜んだ。

其後十數日してから、父に連れられて中學所在地のM市に向つた。汽車の窓から白堊の中學校舍を望んだ時は、僕の目からも自然と涙が溢れたのであつた。

蠻勇君の蠻勇覺帳

痛快の價金五圓也

兩國の或牛屋で晩飯を食つて居ると、僕の隣りで飲んで居た無類漢風の二人、女中が一寸した無禮を種として猛然と怒り出した。何だか樣子で見ると、金がないもんだから物言を付けて勘定を踏倒そうとしてるらしい。外の女中や男が宥めに來ると、二人とも益々附け上がつて、尻をまくつたり肌脫ぎをしたり、『やい己を知らねいか』とか、『こう見えても本所の誰々と云ふ兄いだ』とか勝手な熱を吹く。生意氣な奴等だ、斯麽奴は懲しめて置く必要があると思つたから、故意と大聲

で『喧ましい奴等だな』と獨語をやつて見ると、思ふ壺、好い敵手が出來たとばかり僕の方に向つて『ヤイ書生ッポ、何が喧ましいんだい、俺の口で俺が物言ふのを何が喧ましいんでえ』と變な眼玉で詰寄せて來る。僕は默つて之を聞かぬ振をしてると、一人の奴め益々圖に乘つて、突然僕の胸倉を取つた。機熟矣、何をするッと叫んで其野郎の頭へポカ〳〵鐵拳を授ける。弱虫の醉どれと來てるから丸で小供を扱ふやうだ。

と見たもう一人の野郎、麥酒瓶を摑つて僕に蒐つて來る。之で撲られては大變だから、摑んで居た奴を楯とし、突かゝつて來た所へドスンと押してやると、瓶は手を放れて向ふの硝子窓をガチャン、二人はお重餅のやうになつてドタンガチャ〳〵ッと皿小鉢の上に倒れた。僕は其上に飛蒐つて二人の頭を交代にポカ〳〵撲る。二人でグヨ〳〵藻掻くけれども、確乎摑まいてるから立上り得ない。可い加減撲つた所へ、怖がつて遠卷に卷いて居た亭主や男が來て、まあ旦那と僕を止める。大概こんなもんで可いだらうと思つたから、之を機會に立上ると弱い奴め、突俯したまゝ顏を上げもせぬ。僕は『之から氣を付けないと又非道い目に遇はしてやるぞ』と袂から五圓札を出し『之で此奴等の勘定も取れ』と亭主へ渡して、『イヤそれでは却つて旦那……』とか何

とか云ふ聲を後にしてスーッと此内を出た。ア、馬鹿に痛快だつた、而し此五圓は月謝に出そうと取つて置いた金だつたので、此が爲に十日許學校を休んでしまつた。而し痛快は痛快ぢやつたよ、確かに五圓の價はあつた哩。

ナゼ俺を笑つたか

教場で英語の輪講が當つた。チッとも下見がしてないから大に當惑したが、されば云ふて出來ませんと云ふのも口惜しいし、い、加減にやつ付けろと大膽に立上つた。案外易かつたので半分ばかりは無難に譯したが、中頃になつてどうしても判らない字が一つある。まゝよ前からの關係で推して大抵そうらしいと思ふ譯を付けてやれと、當て

づッぽうに譯したが、果して違つて居たと見え、先生は變な顔で僕を見る。級の奴でも四五人クス〳〵笑つてるのがあつたが、中で平常英語が少し出來るのを鼻にかけて居るハイカラ野郎、さも僕を侮蔑したやうな面をしてへゝゝゝと笑ひ腐つた。畜生奴失敬な奴と一時にグッと癪に障つたから、突然本をかなぐり捨て、一席措いて後ろに居たハイカラの首筋を掴んで『失敬な奴、なぜ俺を笑つた』と面を卓子の上に押付け、ポカ〳〵五ッ六ッ撲り付けた。先生も生徒も呆氣に取られて吃驚して見て居たが、

中には我黨の奴でもつと毆れ〳〵などゝ應援する者もある。僕はいゝ加減小突廻した末、傍にあつたインキ壜を取つて頭からコテ〳〵打ちかけ、ぐいと首を上げると、ザラ〳〵になつたハイカラ頭に、インキで班猫のやうになつた面！抵抗の氣力もなく、ブル〳〵慄えて居る樣滑稽よりも寧ろ可哀相になつたから、手を放して自分の席に歸ると丁度ガン〳〵と十分の鐘が鳴つた。先刻から默つて見て居た先生は默つて教場を出て行く、我黨の奴等は萬歳などゝ叫ぶ、彼は突俯したまゝ頭を上げもしなかつた。

僕は之が爲め、五日間の譴責停學を食つた。本當ならもつと嚴しい罰を食ふ處だつたのを、此英語の先生が旨く云つて少なくして呉れたのだそうな。後で先生に遇つた時『實際君のやり方は痛快だつたよ、

俺が教師でなければ、あんなハイカラは一緒になつて調伏してやる』と云つて居られた。聞けば先生も一高在學時代、校中第一の蠻勇漢を以て目された人だと云ふ事である。

■神聖の愛も糞もあるかッ

或日僕の下宿に、御茶の水高等女學校に通つて居る妹が訪ねて來て『昨日學校の歸り途に、變な學生が後をつけて來てこんなものを渡しました。突返そうと思つたけれども、恐かつたから其まゝ持つて來ましたが、兄さん見て下さい』と封のまゝの手紙を出した。表にはかゞやく星の君、裏にはなみだの子と譯の判らぬ事を軟弱極まる文字で書いてある。開けて見るとうまくもない字で長たらしくヤレ『花の御

姿にあこがれて居る』とかヤレ『此弱き子の聖き愛を受けさせ給へ』とか同じやうな舌たるい文句の百萬遍を繰返し、最後に『是非御目にかゝつて吾が胸の思ひを聞いて頂きたいから、明夜八時頃靖國神社の池の畔へ來て下され』として御返事は左記へと宿所姓名まで麗々しく書添えてある。咄々實に失敬極まる奴だ。斯麽奴が仕事の代りに女たらしをやつて、無垢の婦人を墮落させんとしてるのだ。苟くも男兒の分際として斯の如き軟弱

な文辭を弄し、知りもせぬ女に附文をするとは何たる醜劣の事ぞ。實に男兒の面汚しだと、目前に其男が居たら鐵拳の五六十も喰はしてやりたい程憤激して居ると、丁度そこへ蠻勇を以て意氣投合して居る友人秋山がやつて來た。早速此事を話すと秋山も大憤慨、是非斯麽奴は懲さねばならぬと敦圍いたが、相談の末一策を案じ、其軟弱漢に會つて散々撲り付けると云ふ計畫を立てた。其策と云ふのは妹に手紙を書かして、靖國神社で御待申しますと云つてやり、妹の代りに我々二人が行つて居て散々打んなぐると云ふので、妹はそんな事をしては後で仇をされると惡いと云つたけれども、無理に手紙を書かせ、目印として右の手に白ハンケチを携へて來て下さいと書添て投函した。

軈て、同夜八時我等兩人は池の畔に行つてぶらついて居ると、來た

〳〵、夜目にもそれと知れる角帽に洋服のハイカラ男、御約束通り右手に白のハンケチを持ち、人待顔に池の畔を行つたり來たりして居る馬鹿野郎本氣にしてやつて來てるわいと、可笑しさも可笑し暫らく彼の擧動を見て居ると、神ならぬ身のもう少しすると酷い目に遇ふとも知らないから、時計を出して見ては、彼方を探したり此方を探したりしてる。もう可い頃だと思つたから、僕は近くに寄つて突然『○○君』と試みに其名を呼んで見ると、彼はドギマギして、狼狽てゝハンケチを衣囊に隱しながら『ハイ』と答へた。愈よ此奴と決つた。

『貴樣だな、僕の妹に變な手紙を渡したのは……。』と先づ胸倉を摑まへる。彼は益す吃驚して、

『貴君亂暴ぢやありませんか――私は神聖の愛情を……。』

『神聖の愛も糞もあるかッ、貴樣の樣な墮落學生は……。』

『墮落學生とは何です、失敬な事を仰しやい。』と窮鼠却つて猫を嚙むの體、細いステッキを振廻して僕に抵抗せんとする。傍で見て居た秋山は突然其ステッキを奪取つてポカッと一つなぐる。僕はヂタバタする彼を一寸押すと弱い奴、グナリと其處へひしげる。飛乘つて胸をグイ〳〵小突くと彼も死物狂ひ、僕の手にカブリと嚙付いたから、ハッと手を放すと其隙に僕の下を脫し起上つて逃げやうとする。僕は猿臂を延して襟首を摑まへ、憎さも憎しポカ〳〵撲り付けると秋山も一緒に鐵拳を浴せる。痛快々々彼は兩手で頭を防いで居たがとう〳〵『許して下さい〳〵』と泣聲を出す。そう容易には許されないと、殆んど腕が草臥れる程滅茶苦茶にどやし付け、もう可いだらうと僕は手を放す

秋山は未だ足りないと見えて、代つて襟首を掴まへ五つ六つ撲つた末

『此野郎、之れからあんな失敬な事をしないか、オイコラ。』と黄色な聲で泣てる彼を池の側まで引張つて行つたと見るや、一突きドシンと突くと可愛相にザブンと計り池の中に箝り込んだ。僕は

『オイ大概にして許してやれ。』

と云ふのも關はず、秋山は這上らうとする奴を却々這上らせず、『斯麽奴はウント懲して置かなくてはいかん……コラ今度あんな事をしたら許さんぞ。』と隨分酷い事をする、半身水に侵つてザブ〳〵してる彼の頭からシャア〳〵小便をひつかけた上、

『もう歸らう、あゝ痛快だつた。』

『隨分荒つぽい事をしたな、可愛相に――。』

『なあに、癖になるからあの位にやつて置かなくちやいかん。』

僕等は悠々と其處を引上げる。五六歩してから振返つて見ると、彼は小便と水でズブ濡になつた身體を、ズル〳〵陸に這上つて居た。

其後、涙の子先生はどうして居るか一向消息が判らぬ。秋山は遇ふ度に實際あの時は痛快だつたなと云つて居る。僕の嚙み付かれた傷は全然全癒つたが、未だに痕が殘つて居る。

涼風股下に湧起る

夏の晩牛込への歸り途、牛込見附の處へ來かゝると、向の方から若い女と男がベチャ〳〵何か喋舌り乍らやつて來る。眞向に差して居る月の光りで見ると、平常道德の人格のと、イヤに高潔臭い事を云つて

居る同級生の前田と云ふ奴、何だか得體の判らぬ女と一緒に歩いてるのだ。失敬な奴め、常々他人の品行などに就てどうのかうのとお節介をやつて、自分は頗る潔白面をして居る癖にと思つたが、譯もなく撲り付ける譯にも行かないから、一つ脅かしてやれと知らん顔で近くに寄り、通り違ふ機會に『前田ッ!!』と大きな聲で怒鳴つた。彼は吃驚仰天『エッ』と云つて振向ひたが、僕は其時折よく瓦斯が腹中に籠つて居たから、附錄として猛烈な奴をグ

ーと一發打放し、ハヽヽと大笑して行過ぎる。彼等は益す敗亡、ベチヤクチヤ喋舌つて居たのをピッタリ止し、急に放れ〳〵となつて狐鼠〳〵と向ふに行つて了ふ。あゝ痛快だつたと獨りで微笑みつゝ歩いて行くと、初めて氣が付いた！　大砲の發射が少し猛烈過ぎたので、本物が少々爆發して居るらしい。失敗つたりと思つたがもう後の祭り、仕樣がないから牛込署前の水道栓に行つてジャア〳〵洗つてやつた。正に之れ日光は裏見の瀧、涼風股下に起つて清快眞に云ふ可らず、失敗の爲に却て思懸けなき涼味を掬し得た。犢鼻褌は唯の所へ捨てるのも惜いと思つたから、神樂町の藝者屋道に入つて、某待合の玄關口に捨てゝ來た。

蠻卑怯者を海の中へ

三月の下旬だと覺えて居る。秋山と二人で逗子へ遊びに行き、和船を借りて海岸を漕ぎ廻つて居ると、學校で顔を知合つて居る筒井に下山の二人、矢張此處に遊びに來て居たものと見え、海岸を歩いて居たが、僕等が船に乘つて居るのを見付けドウカ乘せて呉れと頼む。此二人は我々の憎む當世ハイカラぢやないけれども、平常イヤに闘ぶつて餘り虫の好かぬ奴だが、折角頼むから乘せてやる事として今度は少し沖の方へ漕いで行く。天氣はよし海は穩かなり、江の島や富士も遙かに見えて、我等無風流漢も一寸一句位唸つて見たくなる。代り番こに櫓を押して小壺の沖の方へ出かけたが、下山は櫓が上手なので大天狗

之はどうしても敵はんので、流石負け嫌ひの僕も閉息して居ると、下山は圖に乘つて夏期に葉山へ游泳に來た話から盛んに游ぎの法螺を吹く。僕は先刻から小癪に障つて居た處だから『そんなら此處で游ぎつこをしやうか』と戰を挑んだ。彼も法螺を吹いてる處だから、勢ひ寒いからなどゝ云つて拒む譯には行かぬ。『ヨシ君が游ぐなら僕も游ぐ』と來た。秋山はニヤ〳〵笑つて櫓を押して居る。筒井は『寒いから止し給へ』と僕の方を止める。併し僕は云出したからには止めるのは厭だ。天氣は暖かなり寒中にさへ游いだ人があると云ふもの、ナニ大した事はあるまいと素ッ裸になつて『イヽカ俺が入つたら貴樣も入るんだぞ』と元氣よくドブンと飛込んだ。

何しろ三月の下旬、未だ櫻が蕾の時節である。大して冷たくはある

まいと思つて飛込んだに、其冷さつたらない。丸で身體は麻痺るやう、睾丸などはピリ〳〵するやうに痛い。けれどもこゝで『オヽ寒い』などゝ云つては吾輩の頑張り主義に背くし、下山の奴に向つて口惜しいから、何ともないやうな顔をして悠々と抜手を切つて船の廻りを泳ぐ。併しいくら蠻勇を振つても、三四分許り水の中に居たらもう何うも斯うも堪らぬ。うつかりしてコムラ返りでもしては大變だから急いで船に飛

上ると、全身は眞赤になり殆ど知覺を失なつてる。未だ船に居た下山は此有様を見て怖氣が付いたか、卑怯にも辭を構へて飛込むのを止しそうな形勢を見せた。平常大きな事ばかり云ひ腐り、且現に約束して居る癖に卑劣極まる奴だ。是非入れてやらなくては、寒いのを我慢した折角の頑張が損になる。

『オイ卑怯な事を云ふな、約束だ入れ〳〵。』

『イヤ君には敵はん、もう入らなくとも負だ。』

『いかん〳〵、入ると約束した以上は入れ。』

『負だと云つたら入るに及ばんぢやないか。』

彼奴は卑劣にも敗北に甘んじ、そして入るまいとするのだ。剰さへ僕に突懸るやうな物の言振をする。失敬な奴、小癪な奴、かうなつては

此方も意地だ、無理々々でも入れてやらなければならぬ。

『オイ貴様アどうしても入らんのか。』

『入らん。』

『コン畜生失敬な奴！』と僕はシャツ一枚になつてる下山を、横合から猛烈に押したから堪らない。野郎面を喰つてドブンと潜り込む。人の悪い秋山は反對の方向に船を進める。筒井は中に入て困つて居たが何とも仕様がない。ポカンと浮出た下山は怒りの眼玉で此方を睨めつゝ、圖々しくも直ぐ舟に上らうと泳いで來たが、秋山は知らん顔で益々舟を遠ざかるやうにする。痛快々々、下山は一生懸命、彼是三分以上になつたと思ふ頃秋山は漕ぐのを止めたから、やつと船に取付いて恨めしそうな顔で上つて來る。唇は紫を通り越して黑色の方に近く

全身粟立つて鳥の毛を剝いだやうだ。若し憤怨の餘り僕に蒐つてゞも來たら、もう一層酷い目に會してやらうと睨まいてると、彼も自分の力量を知つてると見え、變な面をし乍ら悄々として着物を着る。船中相默して頗る御座の醒めた體であつたが、此方は痛快の沈默、向ふは敗北の沈默で、僕は胸中愉快で堪らない。其中秋山は船を浪子不動の下の邊に着けて宣告を下した。

『下山、貴様ア此邊から歸つた方がいゝだらう。』

下山はウツカリすると、又酷い目に遇はされると思つたから、濡れたシャツを携へ無言で上陸する。筒井も已を得んから一緒に上つて行く。僕等は再び舟を出して悠々と漕いだ。逗子の岬を背景に下山の腰拔がしほ〳〵歸つて行く樣、遙かに之を海上より望む我々には、何と

も云はれず痛快な光景だ。秋山は

『イヤ、實に痛快ぢやつたぞ』と云つて呵々大笑した。

一高に入學する迄

■秋田犬と云ふ綽名

大西武太郎君は生れ付きの負けず嫌ひであつた、日本一の頑張り屋であつた、『强情我慢』其物といつてもいゝ程の人間であつた。

東北の田中學に居る時分、如何なる嚴冬の際にも小倉服の下にシャツ一枚しか着なかつた。外の學生は大部分防寒用の外套や首卷をして居たが、大西君は足袋さへ穿かずに濟まして居た。いつも一時間の晝休みにやる各學級の對抗蹴球戰——蹴球戰と云つても何も規則があるのではない、蹴球を運動場の敵方の柵に付けた組が勝つのである—

——には、最も奮戰する勇者で、球を掴まへたが最後、手負猪のやうに猛進し、追縋られて服を裂かれやうが、平常憎まれてる上級生に血が出る程撲り付けられやうが、滅多に敵手に渡さなかつた。或時などは有志總代として不品行な一敎師を面責し、其敎師に頭を毆られたのを怒り咽喉絞めをかけて一時氣絶させた。其事が學校の問題となつて同志の名を明せと迫られたが、どう〳〵頑張つて口を開かず、自分唯一人一ヶ月の停學を食つた事もある。又曾て仲の惡い農學校の生徒と爭鬪した際、敵の巨漢に組敷かれ乍ら其脛に嚙付き、遂に敵を閉口させて以來、秋田犬と云ふ綽名を付けられた事もある。

かう云ふと單に負け嫌ひな亂暴者としか思はれぬだらうが、大西君には人間の尊むべき至純の情があつた。彼が最も心服してゐる某敎師

が病死した時などは、人夫に伍して素跣足で其棺を舁つぎ、又悲しみに病める未亡人の爲に數日間薪水の勞を執つた。一級友が脚氣を病んで學年威驗を受け兼ねんとした時に、一里近くの道を背負つて登校した事もあつた。斯麽風な彼れの尊い性質は、求めぬけれども級友の人望を一身に集めて、毎年級長に選擧され、其他の同窓も亦敎師も、心ある者は皆彼を敬愛せぬ者はないのであつた。

それに彼は喋舌る事が下手だつたから、英語の譯讀や國語漢文などの講義物は點が少かつたが、代數幾何三角などの數學に於ては異常の

天才を持つて居た。彼は負けず嫌ひの質から、得意でない講義物なども懸命に勉強はしたが、書いて出す答案は兎も角、平常の教場ではどうも滿足に行かなかつた。其代り數學類は教はつた丈けで、別段勉強もせずに、滿點を贏ち得、いつも教師に舌を卷かせた、彼が將來の志望に造船工學を選んだのは、其幼時我軍艦千島が英國商船と衝突して沈沒したのを憤慨し、我國自ら丈夫な軍艦を製造しなくてはならぬと感じたからにも依るが、一は自分の天分が數學に長けて居るのを覺つたからでもある。

明治三十〇年春、彼は良好な成績を以て日中學を卒へ、幾多の教師や後進に惜まれつゝ學校を去る事になつたが、更に高等な學校に進むに就て、流石の頑張り先生も一つ困つた事が出來た。

腕で得た七圓の金

彼は中學を卒る時、何とかして一高の二部に入り、志望の工學を修めようとして之を親友に語りもしたし、自分で受驗科目の準備なども した。併し貧乏士族で役場の小官吏を勤めてる彼の父には、到底子供を東京に遊學させるやうな資力はなかつた。彼は一家の事情もよく心得てるから、迚も父に學資を出して下さいとは云ひ得ない。云ひ出した處が又出來もしない。其中上京した友達からは某豫備校に入つたから、君も早く來いの、願書提出期日が迫つて來たのと繁々云つて來る。父も我子に遊學させたいは山々だか、さて何とも仕樣がないし武太郎君の方でも唯焦慮懊惱する許りである。

彼は稍裕福な親戚か、物持な友人の父親にでも懇願して見たら、何とかならぬでもあるまいと思つても見たが、人に頭を下げて頼む事は生れ付きが彼を許さなかつた。而し何としても此儘で止まりたくはない志望の學科を勉強したい。せめて旅費丈けでもあつて東京に行き着きさへしたら、後は男一匹甚麽苦行をしても眞逆野倒死もしまいと、彼は所存を父に打明けて切に許諾を乞うた。若し金がなかつたら米を擔いで歩いてゃも行くと

云ふ彼の決心を聞いて、父も涙を湛へて其願ひを許した。

丁度其頃或官署で謄寫物の筆生を募つて居た。彼は直ぐ樣知遇を得た中學教師の許へ行つて其官署へ紹介を得、筆生に雇はれる事になつた。それは一枚一錢と云ふ非常に安價な謄寫料であつたけれども、日に限りのある上京期を控へて、少くも東京迄の旅費を得なくてはならぬとの決心から、唯一心不亂になつて努力した。官署で書き足りぬ所を特に家に持歸つて夜も寢ずに勉強し、十日許りの間に七百枚餘りのものを書き上げた時は、係りの吏員も眼を睜つて其精力に驚歎した而しそれよりも自分の力で七圓なにがしの報酬——夫は志望の第一歩たるべき上京費になる——を掴んだ彼の歡喜は甚麽であつたらう。

其夜家では母が心盡しの手料理で送別の晩餐が開かれ、父の涙、母

の涙、祖母の涙、各人各様の涙に送られて淋しい停車場を立つたが、プラットホームで父の振つてる定紋付の提灯が漸々、小さくなつて來ると、流石強情我慢の彼も思はず涙が頬に傳はつた。家の人々を思ふ愛惜の念、志望の道に就き得た喜び、色々の思ひが胸にこんがらかつて居る中、數日奮勵の勞が間もなく彼を熟睡に引入れ、鐵路一百五十餘里、一度も目が覺めず、翌朝車掌に搖り起された時は、汽車は既に賑やかな上野のステーションに着いて居た。

■下谷フタナガマチ

地織の着物に汚い袴、不細工な徽章の付いた海軍帽、夫に山桐のゴツン〳〵した下駄を穿いて、竹行李を肩に載せた彼の姿は、地方人を

見馴れて居る此驛の附近の人の目にも、可成異様に映つたらしい。俥屋達も一寸聲を掛けたのみで後は嘲笑の目で見送つたが、彼は一向頓着なしに交番の巡査に就て、自分が一先づ便らうとして來た知人の住む、下谷二長町への行方を尋ねた。それはずつと以前に彼の家の下男をして居た爺の子が、東京に出て玩具の製造をやつてる家なのである。

『下谷區フタナガマチの方さ行くには、どつちさ行けばよがんすが。』

之でも彼としては充分注意して東京語を使つた積りであつたが、東京の巡査には迚も外國語見たいな田舍辯は通じなかつた。

『エ、下谷區フタナガマチ？　其麼處は聞いた事もないが、其處がどうしたと云ふんか。』

『ハ、下谷區フタナガマチさ行きてやと思ふんでがんすが……。』

彼は頻りにフタナガマチを繰返すが、フタナガマチでは何うしても通じようがない。判らないから何度も聞き返すのであつたが、行李を擔いだ異風な男が、巡査と問答してると見て、通行の人々が見る間にゾロ〳〵集つて來る。中には泥棒だらうかの、或は支那人だらうのと囃し立てる者もある。始めて東京へ着いた許りの彼は、斯麼大勢に圍まれた上色々な當て推量を云はれて少しく逆上氣味になつたが、例の負けず嫌ひ、恐い目をし

てグッと皆を睨め付け、巡査には挨拶もせずに出鱈目の方角へサッサと歩き出した。物好きな群集は遠寄せに後から蹤いて來る、巡査は呆氣に取られて唯ポカンとしてるばかりだ。

早く目指す家を訪ねたいが、斯麼失敬極まる彌次連に聞くのも殘念だし、巡査にさへ通ぜぬのを況して彼等に判らう筈もない。歩いてる中にはうまく行當るかも知れぬ、腹が減つたら郷家から授けられて來た辨當の握り飯が殘つてるのを食へばいゝさと、行李の肩を替へ〳〵いゝ加減に前進したが、其中不圖袂に所番地の覺え書を持つて來たのを思ひ出して、行遇つた一巡査に今度は唯默つて其紙片を示した。巡査は怪訝な目をして彼の顔を見たが、直ぐ啞だと思つたと見えて、

『ハヽアロが利けないんだネ、二長町なら斯う行つて斯う——』と手

眞似で色々と説明した上、親切に鉛筆を出して略圖迄書いて呉れた。

まだ執拗く蹤いて來た彌次は『彼奴口が利けない風をしてるんだ――先刻フタナガマチなんて二長町の事なんか、ハヽヽ、馬鹿にしてやがらあ』などゝ口々に喇り笑つた。

彼は其巡査の親切で漸く玩具屋を尋ね當てる事を得たが、着京早々斯麼癪に障る目に遇つたので、當分鄕國の者以外とは絶對に言葉を交はすまいと決心した。

一二日の絶食は平氣

玩具屋の主は煮焚から商賣物の製造まで唯一人でやつて、小やかに店を張つてるのであつたが、舊主の子なる武太郎君の上京を心から

歡迎し、こゝでよくば試驗の判る迄居て下さいと勸めるのであつた。

彼は裕かでもない家に厄介になるのを太く心苦しがつたけれども、差詰め金もないし又行く家もないから、好意に從つて其處に同居させて貰ふ事にした。

其代り商品の製造でも臺所の仕事でも、主と共に勞を分ち、夜暇になつてから後薄暗いランプの下でコツ〳〵受驗の下調べをした。朝は暗い中に起きて遠方にある共用栓から水を汲み、飯を焚き、晝は手を眞赤にして彩色を手傳ふ、それが終ると夜遲く迄本に取蒐る。下男、職工、學生の兼帶で、流石に困憊する事もあつたが、彼は一言も之を口に出

さず、常に愉快に働いた。主もいゝ相手を得たと非常に喜んで『若旦那は全く偉い、矢張田舍の人は丈夫だ』と賞め乍ら、同じく懸命になつて稼いだ。そして時には必要な參考書を買つて呉れなどした。

而し其日暮しと同じやうな小やかな商賣をしてるのだから、入るべき筈の金が入らぬ事でもあると、直ぐ其日の食料費にも差支へた。或時などは米櫃が全く空になり、引割麥と買置きの大根を一緒に煮て、之に鹽を振かけたので、二日間の飢を凌いだ事もあつた。又或時は何一つ食ふ物がなくなつて、二日半も水ばかり飲んで過した事もある。

けれども武太郎君は平氣な顏をして例の通り働き、例の通り勉強を續けた。同じく飢じい主も氣の毒な顏をし乍ら矢張默つて働いた。或時矢張り飢饉で居た時、先輩の一人が來て『今日國から爲替が來たから

何か奢らうか』と云つたが、彼は何ともない顏で『別に食べたくもがんせんから、止めた方がよがんす』と、至つて手輕に斷つた。

■貴方朝鮮人でせう

彼は或日主から貝の紐の佃煮を頼まれて買ひに行つたが、店に一寸見當らないので貝の紐があるかと云ふ意味を主婦に訊ねた。主婦は半分解つたやうな顏で、シゲ〳〵彼の顏を見て居たが軈て『貴方日本語大變上手、よく解ります、どうかもう一遍仰しやつて下さい』と問返した。何の積で斯麼事を云ふか解らぬが、突然なので稍ドギマギし乍ら再び云ひ直すと、其晦澁の辯は彼女をして遂に朝鮮人との判斷を下さしめたと見え、今度は『貴方朝鮮でせう、貴方のお國公使館番町あ

る、私の親類行つてます』と來た。彼女の前の言葉の旨意は之で始めて判つたが、彼には何と云解く言葉も出ずに居ると、店に居た小供が『オイ家に朝鮮人が來てるよ、朝鮮人が……』と其處らに遊んでる友達を呼集めた。彼はとう〳〵買物の目的を達せずに、多くの小供に囃され乍ら歸らざるを得なかつた。

萬世と思つて品川へ

入學試驗が濟んでからのこと、或晩品川の得意先へ商品の掛取に賴まれて出かけた。例の如く目指す家を搜す爲に數時間を費したので、歸りは辛く終電車に間に合つた位遲くなつた。終日の勞働の上に搜し廻つた疲れも出て、思はず車窓に靠れ乍ら居睡りをして居たが、銀座

四丁目に來た頃車掌は彼の肩を叩いて『貴方どちら迄、乘越すともうありませんよ』と注意して呉れた。突然快よい眠りから覺された彼は自分の降りる處に來たのだと思ひ狽てゝ電車を降りたが、何だか勝手が違ふと思つてよく〳〵見ると電柱に銀座尾張町と書いてある。偖は失敗つたと思つたがもう電車はない。よしさらば已むを得んから歩く事にしよう歩いた處で一里ともあるまい、人が通らんで結句五月蠅くなくつていゝと、線路に沿

うて呑氣にブラ〳〵歩き出したが、其中雨がトシ〳〵降出して來た。軈て一時間半も歩いたかと思ふ頃、之はしたり電車の線路がピタリと途絶えて了つたではないか。

流石の彼も此異變には吃驚せざるを得なかつた。瞳を凝らして薄明りに電柱をすかして見ると、こはそも如何に『品川八ッ山』と標示してある。

此時既に夜半の二時、雨は益々盛んになるし、假令之から又歩き直した處で、迚も曉方迄には覺束ない。寧ろ朝の電車まで待つに若かずと、路傍に置いてあつた瓦斯工車の大鐵管を幸ひの雨宿りに潜り込んで、呑氣にも又其處に熟睡して了つた。

鐵管の中から引致

翌る朝早く仕事に來た工夫等が、鐵管の中に大鼾が聞えるので見ると、薄汚ない男が寢て居る。驚いた工夫は何でも之は泥棒か何かに違ひないと、ソッとして置いて直ぐ交番に届出で、出張の巡査と共に中から彼を引張出した。

『オイ、お前は一體何處の者だ、どうして斯麼處に寢て居たんか。』

快よい夢から起された大西君は、暫時呆然として立つたが、相變らずなる彼が吃り勝な辯と、單衣に附着してる血と見紛ふ赤繪具の班點は、警官の疑ひを惹くに充分であつた。

丁度其頃品川邊に强盗が横行したので、彼は其嫌疑を受け本署に引

立てられたが、懐中に在つた身裝に相應せぬ金は一層の疑ひを增させた。併し彼は是迄も度々失敗した晦澁な言葉で辯じて、却つて事面倒になるも無駄な話だ。時が來れば判る事だから、それ迄警察に居てやれと紙の端に『小生は下谷區二長町玩具製造業某方の店員なり、主人に照會されよ』と書いて係官に示した切り、後は何を訊かれても絶對に口を噤んで了つた。

二時間許の後下谷署を經て照會を受けた玩具屋の主は、どうなつた

ちうと心配して居たから、取るものも取敢ず匆惶としてやつて來た。大西君が前夜の呑氣な失敗から鐵管内宿泊に至る顚末は、主人の通辯で係官に通ぜられ、署員一同の大笑ひとなつたが、彼が特志の苦學生なる事も主人の言で判つたので、係官は太く感じ入り、部下の誤認を陳謝した上無事に釋放された。

數日の後發表された入學試驗の成績に彼は首尾よく合格の榮を得、鄕國から學資の補給者も出來て、夏中玩具屋に御禮奉公として働いた後、愈々志望の第一歩に踏入るを得た。此頑張漢大西武太郎君は、今造船少監として英國に出張中である。

黴びた餅

■愛の盜るゝ父の手紙

此新年は御身一人缺け候爲め、何となくもの淋しき正月を迎へ申し候、併し修學の爲には已むを得ざる儀に有之、何分の辛抱肝要に存候、就ては歸省中の林源寺の息子來る○日上京の由に付き、同人に托し例の通り學資金九圓送付致し候間、△△中學林の寄宿舍を訪ねて受取申すべく、尙母上の心付にて我等手搗の餅同時に托送仕るべくに付、同宿の友人達と共に徒然の折にても笑味なされ度候。

家鄉の父から斯麼手紙を受取つた良一は、父母の情と共に、久し振りで好物の餅が食へると云ふ嬉しさが込上げた。

『オイ、鄉里から餅を送つて來るぜ、餅を——。』

覺えず大聲で斯う叫ぶと、飯炊きの當番で頻りに土釜を乘せた七輪を煽いでる坂本が其煽ぐ手を休めて振向いた。

『エ、餅が來るッて、ソリヤうまいな——そして何日頃來るんだい？』

『四五日の中には來るんだ、東京に出て來る奴に賴んで寄越すつて來たから――。』

『さうか、素的々々、何しろ正月になつて僕等はまだ餅も食はんからな。お蔭でお正月が出來ると云ふ譯だネ。』

『ハヽヽヽ、併し親父氣が利いて澤山送つて寄越せばいゝが……。』

『慾張らなくなつて大丈夫だよ。まだお目には懸らんが、親切な君のファザーに敬意を表して健康を祝さう――ファザー萬歳ッ。』

『ぢや僕は餅の爲に敬意を表さう――餅萬歳ッ。』

二人は如何にも嬉しさうに笑合つて、良一は宿題の下見に、坂本は七輪の煽ぎ方に復した。共に數日後に來るべき餅を樂みつゝ――。

餅が來るとて狂喜

二人はまだ一高に東寮と西寮としかない時分の、一部一年の生徒であつた。良一は東北の生れ、坂本は九州の出であるが、入學の當座寮に同室してから兄弟にも優る親しい中となつた。そして兩人共學資に乏しく、一ヶ月十圓足らずの金では、當時食料の廉い寮に居てすら迚も間に合はぬので、此千駄木に間借をして二三ヶ月前から、自炊を始めたのである。

それでも間代とも月に五圓近くの費用が懸つた。殘りの四圓いくらで、月謝小遣の全部を支辨せねばならぬのだから、自炊生活の窮乏も一通りではなかつた。副食物がなくて飯に醬油をかけて食ふやうな事

もあつた。其飯もなくて芋だけで凌いだ事もあつた。二人はそれでも一向平氣なもので別に弱音も吹かなかつたが、斯る生活の間へ餅――正月になつてもまだ食はなかつた餅が來ると云ふ福音は、大の男を狂喜させたのも全く無理がなかつた。

『まだ餅が來ないかなァ』『彼奴早く出京て來りやいゝのに、何を愚圖々々してるんだらう』などゝ云ひ暮してゐる中に、愈々林源寺の息子が出發したと云ふ葉書が來た。學校の歸りに前に同室だつた二人の友達も誘つて來て、餅振舞を催ると云ふ自炊寮開闢以來の珍事である。友達は土產に豚肉を買つて來て豚雜煮の準備をする。坂本は阿部川がいゝとて黃名粉を買つて來る。良一は『火をおこして待つてるぜ』『成るたけ急いで歸つて來いよ』などゝ云ふ聲に送られて、イソ〳〵と餅

受取りに出かけて行つた。

尋ねる人は居らぬ

いくら位寄越したらう？少々重くても多い方がいゝなどゝ、色々な想像に樂しみ乍ら、朴齒の下駄を引摺つて、良一は△△中學林寄宿舍の門を潛つた。

良一は此處へ來て初めて林源寺の息子の名を知らぬ事に氣が付いたが、其父は田村無學と云つて鄕里では一寸名の聞えた坊主な事を知つて居たから、田村と云ふ姓を云へば判ると思つて、受付に訊ねた。

『田村と云ふ人に遇ひたいんですが、居ませうか。』

『田村？』と受付は首を捻つて『田村と云ふのは此寄宿には居ないや

うですが、田村何んと云ふ人ですか？』

『サア、名前は判りませんが、五年級の人で確か此方に居る筈です。』

丁度其處へ一人の寄宿生が出て來たので、受付は之に就て聞いた。

『五年級の田村ッてえのが居るか知らん、此方が訪ねて來たんだが——。』

『五年級の田村と——ア、田村健次郎と云ふんでせう。其人なら去年迄寄宿に居ましたが、今は駿河臺の○○館と云ふ下宿に引越してます。』

良一は之を聞いて全くガッカリした。駿河臺と云へば今來た許の道を後戻りして、更に一里も歩かなくてはならぬ。歩くのは三里でも五里でも歩かうが、首を長くして待ってる内の連中に、其麼に長く待たせて置くのは氣の毒でならない。引越したなら引越したと云つて寄越せばいゝのに、寄宿舍を訪ねろなどゝお父さんも氣が利かな過ぎる。田舍の人は東京の町を極く狹いものだと思つてるから、斯麼無駄足を踏ませられる事になるのだ。それにしても此足で直ぐ駿河臺に行つては、皆がどうしたかと心配するに違ひない。兎に角一旦家に寄つて此事を報告した上、更に出直す事にしようと、スゴ〳〵

千駄木の家に歸つて來た。

■いくら待つても歸らぬ

待つて居た三人は『萬歲』を叫んで良一の歸りを迎へたが、期待の餅包を持つて居ぬのを審つて口々に理由を訊ねた。良一は詫びるやうにして其の譯を語つた。

『斯麼譯だから、僕は急いで駿河臺の其下宿に行つて來る。濟まないが歸つて來るまで二時間許り待つて居て呉れ給へ。』

『さうか、ぢや仕方がない。併し君に許り歩かしては氣の毒だから、今度は僕達が代りに行つて來よう。其の代り君に食ふ方の仕度を賴む。』

『ナニいゝよ、僕は君等に對して持つて來なければならぬ責任者だから——。』

『さうでもないさ、吾々は敢て御馳走になる權利がある譯ぢやないからネ。吾々だつて矢張働かなくちやならぬ義務もあるんだ。』

斯麼一部の生徒らしい事を云つて、三人は良一に賴み狀を書かせた上、元氣よく校歌を合唱し乍ら出かけて行つた。

良一は申譯心に付け燒にする海苔を奮發したり、色々と食事の仕度をして三人の歸りを待つたが、二時間餘り經つて日はトップリ暮れて了つても、却々餅の使者が歸つて來なかつた。若しかすると留守なので待つてるのではあるまいか、そんな事はなく萬望居て呉れゝばいゝが、などゝさま〳〵な事を心配し出した。靴の音を聞いては障子

を開けて見、校歌の聲がするので門口に出て見たりしたが、七時を過ぎても七時半になつてもまだ歸つて來ない。折角おこした炭はズンズン灰になつて了ふし、二三度沸かした豚汁は、一片の餅も入れぬ中に冷え切つて了つた。

其中に雪もよひの空はビショ〳〵霙を降らし始めた。表の方の人通りも絶えて、霙が木葉を打つ音の外に何にも聞えない。良一は唯呆然と洋燈に對して座つて居たが、軈てのことに三人は泥沫だらけになつて默々として歸つて來た。併し誰れの手にも餅の包みがなかつた。

人違ひから取組合ひ

三人が代る〴〵語る所を聞くと、斯麽に長い時間を要したのも道理

意外な事件が駿河臺の下宿に於て起つたのであつた。

殆ど駈足のやうにして目指す○○館に着いた三人は、田村の在否を尋ねると折よく内に居て直ぐ玄關に出て來た。そこで良一からの添狀を渡すと、怪訝な目をして一同を見て居たが『俺は田村健次郎だけれども、良一なんと云ふ人は聞いた事もない。第一金や餅などを何處からも預けられた事はない』と案に相違した返事である。併し坂本は其麽筈がないと信じてるから『夫でも此手紙の本人が○○中學林の寄宿に行つて、確に君が此處に引越した事を聞いたから訪ねて來たのだ。吾々は何も怪しい者ではないし、此通り添狀迄貰つて頼まれて來たのだ。だから、渡して呉れ』と頼むと、彼は大に怒つて『莫迦な事を云ふな、頼まれもせぬ金を渡せとは何事だ、貴樣達は何か企らんで俺を脅喝し